

巻頭言——無芸大食への奈落	1
Preface : Infernal regions as “no accomplishment but eating”	

インド亜大陸におけるインドビエ (<i>Echinochloa frumentacea</i>) の起源と伝播 一生理・形態的形質の比較と DNA 断片長多型 (AFLP 法) から一	加賀美 啓	2
Domestication and dispersal of <i>Echinochloa frumentacea</i> in Indian Subcontinent		
	<i>Hiraku KAGAMI</i>	

トランジション・タウン藤野の理念と活動者の生活の変化	畠山 祐一	4
The concept of Transition Town Fujino and the change of life of civic activists		
	<i>Yuichi HATAKEYAMA</i>	

岩手県旧山形町（現久慈市）と二戸市を訪ねて	川上 香	6
Visiting Yamagata-machi (merged with Kuji-shi) and Ninohe-shi, Iwate Prefecture		
	<i>Kaori KAWAKAMI</i>	

彩色園における農学校の始まり—ぬくい少年少女農学校—	西村 俊	9
Beginning phase of the Agricultural School in Saishikien		
	<i>Shun NISHIMURA</i>	

東京都小金井市の市民農園と江戸野菜の復活に関わる市民意識	木俣 美樹男	13
The Awareness of citizens on community gardens and the revival of Edo vegetables in Koganei-shi, Tokyo		
	<i>Mikio KIMATA</i>	



無芸大食への奈落（続き）～アマチュア国日本の黄昏～……………（黍稷農季人）…………… 24	
Infernal regions as “no accomplishment but eating” (continuation of preface)	
～ A twilight of Japan as an amateur state ～	<i>Mikio KIMATA</i>
資料：環境教育セミナーの概略史 …………… 木俣 美樹男 …………… 27	
Archives of Environmental Education Seminar since 1984	<i>Mikio KIMATA</i>
資料：子どものための冒険学校の小史年表 …………… 木俣 美樹男 …………… 45	
Archives of Adventure School for children since 1988	<i>Mikio KIMATA</i>
資料：個人史に重ねた環境教育活動の 50 年史 …………… 木俣 美樹男 …………… 47	
Archives on the 50 years history of environmental education activity	
based on a personal history	<i>Mikio KIMATA</i>
編集後記 …………… 49	
Editorial note	



巻頭言——無芸大食への奈落

Preface : Infernal regions as “no accomplishment but eating”

幕末のころ、京に上った薩摩藩の侍の出で立ちは質実剛健で、京（都会）風ではなかったので、「いも侍」と揶揄された。田舎風の「いも」で何が悪いと誇り高く、居直れば良かった。しかし、薩摩藩の郷士は地元でも「いも侍」と呼ばれることがあり、屈折した劣等感をもっていたので、明治維新の後、「いも侍」はサツマイモをやめて、「こめ華族」になり、イネを食べることにした。欧米の圧倒的な科学技術による武力によって薩英戦争にあっさり敗退したので、反転して攘夷をやめ、鎖国を解き、欧米の科学技術を導入することにした。明治政府の中心となった人たちは欧米に大挙して留学し、「和魂洋才、富国強兵」を説く、国家主義の政治家や官僚になっていった。

江戸時代幕藩体制下の鎖国の中で、薩摩藩はさらに固い鎖国を「国内」に対して行い、他藩人の入域を極力拒んでいた。ところが一方で、薩摩藩は南西諸島、先島諸島を支配下に置き、琉球を属国として支配し、密貿易をしていた。藩内の支配と経営は郷士制度により堅固であった。家臣を城下に集めずに、外城を各地につくり、防衛・支配体制を日常の事としていた。薩摩隼人は示現流の剣術を学び、暮らしぶりは質実剛健を旨としていた。宗教に対しては不寛容で、キリスト教ばかりでなく、仏教（特に一向宗）も厳しく取り締まり、水戸藩の影響を受けて廃仏毀釈を早くから強行し、神道を強要していた。

シラス台地で稲作は困難なので、早くからサツマイモを取り入れて、食料の確保を図っていた。鹿児島島の美味しいイモ焼酎、多くのサツマイモの品種はそのおかげで生み出されたのである。亜熱帯に近い鹿児島や沖縄が根菜農耕文化に基礎をおくのは必然の生態的適応である。サツマイモがイネより優位にあって当たり前である。京や江戸のコメ消費経済に染まる必要はなかった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという劣等感の裏返し、この思い付きを確かめるために、鹿児島に行き、神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行った。古い屋敷は少なかったが、出城を守る城塞のような石垣の麓街区、庭にも石積みがあり、戦闘を想定した街並み景観であった。

和魂洋才といいながら、国家主義の政策に沿うようになったようだ。柳田国男らのように和魂を求めた人々もいたが、結局は和魂の抜け落ちた洋才としての科学技術を洋魂抜きで無思慮に振興（信仰）することにした。さらに国家主義は幾多の戦争へと人々を駆り立てて、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」では「神風」も吹かず、神風特攻隊の若者を死に至らしめたが、歴史上初めて外国に、本土進攻を許す大敗を喫した。原子爆弾という卑劣な大量殺傷兵器始め、膨大な物量と人員を第2次世界大戦に投入したアメリカ軍に侵略を許し、日本の指導者たちは決定的に民族としての誇りを失った。

アメリカ軍に負けたのは戦時配給制度で中山間地にまで普及させたごはん（イネ）食が原因であり、欧米人が常食としているパン（コムギ）食が健康に良いと、「ムギ官僚」はアメリカからの食料援助に依存した。アメリカからすれば、国際貿易の利益を見込んで、過剰生産したコムギで日本人を餌付けして、食料輸入国に墮落させて、いずれ国際的な食糧戦略に組み入れようとの魂胆であったのであろう。

この戦略は功を奏して、日本人は第一次産業を捨て、自給農耕・生業すら失い、拝金の極致、無芸大食への奈落を選び取ったのである。食料安全保障の政策を思考停止した「無食政治家」のもとで、日出る国の日没を見ることになった。再び、この国の人々はお来迎を拝むことができるのであろうか。

（黍稷農季人）

インド亜大陸におけるインドビエ (*Echinochloa frumentacea*) の起源と伝播

—生理・形態的形質の比較と DNA 断片長多型 (AFLP 法) から—

加賀美 啓

Domestication and dispersal of *Echinochloa frumentacea* in Indian Subcontinent

Hiraku KAGAMI, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

現在わたしたちの生活を振り返ってみると、食生活の中心となるものはイネ、コムギ、トウモロコシ、オオムギなどの主要穀類であり、そのため、世界の農業は穀類の栽培が中心となっている。このような主要穀類のほかに私たちの食生活に重要な役割を果たしている少数派の穀類の多くのものが、「雑穀」と総称されるものである。雑穀 (millet) とは、イネ科穀類の中でも、アワ、キビ、ヒエなどの総称で、耐乾性、貯蔵性に優れ、インドやアフリカでは、今日でも貴重な作物であり、主食のひとつである (及川 2003)。

本研究で扱うイネ科イヌビエ属の雑穀のインドビエ *Echinochloa frumentacea* Link は、主にインドおよびネパール・パキスタンにおいて栽培されており、主食としての飯や粥、不作の年に備える救荒作物、家畜などの飼料として重要な役割を果たしている栽培植物である (図 1)。

かつてはそのきわめてよく似た形態から、日本で一般的に呼称される“ヒエ” *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno と同種と考えられていたが、藪野 (1962) によるヒエ属植物の細胞遺伝学的研究から、両者の構成ゲノムが異なっていることが発見され、それぞれが別の祖先野生種を持ち、地理的に異なった地域で互いに独立して栽培化されたことが明らかとなった (阪本 1988)。

インドビエの祖先野生種であるコヒメビエ *Echinochloa colona* (L.) Link の分布は広いが、インドビエの栽培がインド亜大陸に限られて



図 1 インドビエ

いるため、インド起源と考えられている (阪本 1988、佐々木 1998)。しかし、考古学および栽培植物起源学的な研究報告はいまだほとんどなされておらず、栽培化のはっきりした年代や地域は明らかになっていない (阪本 1988, Katharina 2003, Sir Ghilleen 2005)。

そこで、本研究では生理・形態的形質の比較および DNA 断片長多型の解析をもとに、インド亜大陸で栽培されているインドビエの地理的変異を解析し、栽培化起源地と伝播経路を明らかにすることを目的とした。

材料は、東京学芸大学環境教育研究センター内の種子保管庫で系統保存されているコヒメビエ 7 系統と、インドビエ 42 系統、計 49 系統の種子を用いた。材料の採集地の内訳はインド 43 系統、パキスタン 4 系統、ロシア 2 系統であった。

2010年6月12日から10月28日の期間に、東京学芸大学環境教育研究センター内のガラス室において、これら49系統の材料を同一条件下で栽培試験し、生理・形態的10形質（出穂日数、止葉長、止葉幅、主幹葉数、草丈、有効分げつ、無効分げつ、穂長、穂幅、主幹直径）について計測・観察を行った。

得られたデータを、統計解析ソフト SPSS statistics version 20 (IBM) を使い、Ward 法による階層クラスター分析を行い、系統樹を作成した。また、DNA 断片長多型 AFLP (amplified fragment length polymorphism) 法 (Vos et al. 1995) を用いて、直接的な人為選択を受けない分子レベルでの変異を解析し、近接結合法 (NJ 法) による系統樹を作成した。

解析は、電気泳動によって得られたポリアクリルアミドゲルプレートをよく風乾させた後、ゲル画像をスキャナーで取り込み、Lane Multi Screener (ATTO) でスマイリング補正、ノイズ除去等の画像変換を行った後、DNA バンドを検出し、バンドの有無から 1/0 データを作成した。その 1/0 データを PAUP4.0beta に取り込み、これを用いて NJ 法 (neighbor-joining method) による系統樹を作成し、ブートストラップ法による検定を行った。なお、AFLP 法で使用することが可能だったプライマー組み合わせは、*EcoR* I+AGC / *Mse* I+CTG、*EcoR* I+AAG / *Mse* I+CAG、*EcoR* I+AAG / *Mse* I+CTG の 3 組み合わせであった。

生理・形態的形質の比較による穂の形態的形質、出穂日数、脱粒性、野生祖先種の分布などから、クラスター化された系統樹を栽培型のクラスター、擬態随伴雑草型を中心としたクラスター、雑草型のクラスターの 3 つのクラスターに大別することができた。

また、AFLP 法による解析から、遺伝的変異が比較的高い地域は Karnataka 州および Bihar 州、遺伝的変異が比較的低い地域は Tamil Nadu 州であることが推測できた。栽培植物の地理的起源地では優性形質において周辺地域より遺伝的多様性が大きいとする植物地理的微分

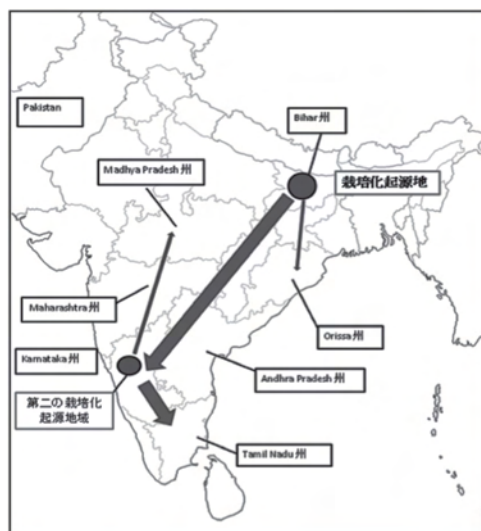


図2 インド亜大陸におけるインドビエの栽培化の起源地と伝播経路

法 (Vavilov 1928) をもとに、Bihar 州周辺が地理的起源地、Karnataka 州周辺が二次的な栽培化起源地と推測された。

以上のことより、インドビエの栽培化起源地はインド北東部に位置する Bihar 州周辺であると推測できた。その後、南西部に位置する Karnataka 州へ向けて栽培化が進み、やがて南部の Tamil Nadu 州や周辺地域へ広がっていったという伝播経路が推測できた (図2)。

トランジション・タウン藤野の理念と活動者の生活の変化

畠山 祐一

The concept of Transition Town Fujino and the change of life of civic activists

Yuichi HATAKEYAMA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

現在の大量生産・大量消費型社会システムは、資源の浪費、気候変動、生態系の破壊、経済格差の拡大、さらには人間の心の問題など、様々な問題を多くはらんだシステムである。このような社会システムを維持し続けることができた要因の一つが、石油への依存である。石油の生産量は近い将来減少に転じると言われており、転じる前の頂点を「ピークオイル」という。ピークオイルを迎えると石油価格が高騰し、食料生産、製造、輸送、暖房など、生活のあらゆる面で大きな影響が及ぶ。

トランジション・タウン（以下 TT）とはピークオイルと気候変動という二つの大きな危機を受け、石油に依存した社会から、持続可能な社会・生き方にトランジション（移行）していこうというイギリスで始まった市民活動であり、社会実験である。本研究では、日本の TT 活動の中でも最も先駆的のもののひとつである TT 藤野を取り上げる。

本研究では、活動者の理念理解と生活での変化について関係を分析し考察する。本研究はこれまで研究があまりなされてこなかった日本における TT の研究の一助となるとともに、市民が行うまちづくり活動として、TT がどれくらいの有用性があるかを示す一助になると考えている。

本研究では、神奈川県相模原市緑区藤野地区を中心に活動する TT 藤野の活動者を調査対象とした。藤野地区は神奈川県の最北西端に位置し、自然豊かな里山の風情を残す土地である（図 1）。また、自然志向の高い移住者が多く、自然と暮らしに関わる市民活動も盛んな地区であ



図 1 神奈川県相模原市藤野地区の位置



図 2 TT 藤野活動の様子



図 3 TT 藤野のワークショップの様子

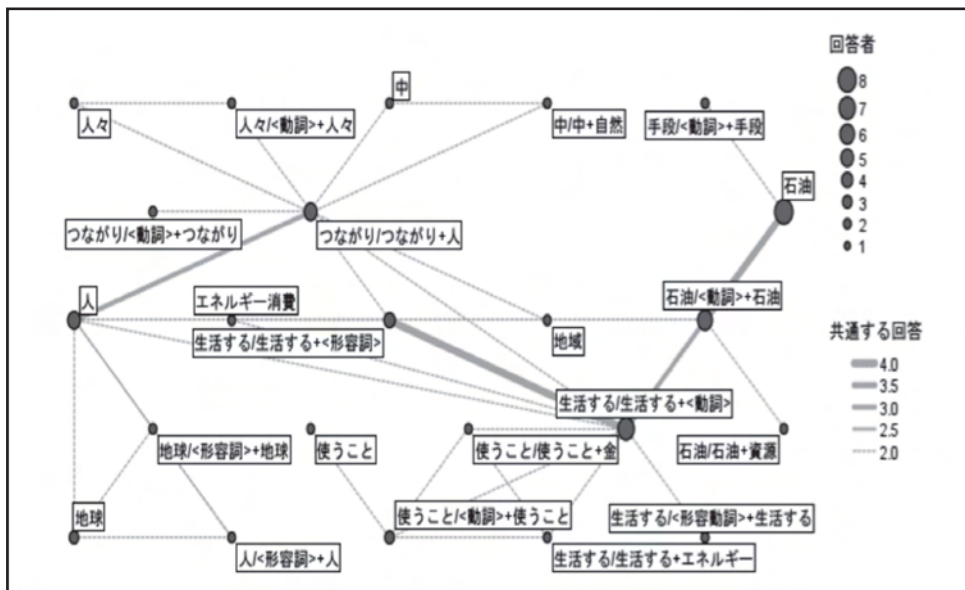


図4 石油を使わない生活が今の生と比べてより良いものになるか、その理由（自由記述テキスト）の分析結果

る (図 2、3)。

調査方法は質問紙調査と聞き取り調査の二つの方法で行った。質問紙調査はTT 藤野のワーキンググループの一つである「地域通貨よろづ屋」の参加者216名に対して郵送法で行った。

また、質問紙調査の統計データは IBM SPSS Statistic 20 を用いて分析を行った。さらに自由記述については SPSS Text Analytics for Surveys Ver.4.0.1 を使い、テキスト分析を行った。聞き取り調査は TT 藤野の活動に積極的に参加しているコアメンバー 4 人を対象として行った。

質問紙調査の結果は、配布枚数 216 枚、回答数、有効回答はともに 28 枚で、回収率は 12.9%であった。

質問紙調査の結果、78.6%の人がTT 藤野の理念を知っていると答えた。また、活動に参加してからの生活習慣の変化も78.5%の人が「あった」という結果になった。しかし、SPSSの分析の結果、「理念理解」と「生活習慣の変化」に統計的に有意な結果は得られなかった。

一方で、「活動で得た知識や技能の実生活での活用」と「生活習慣の変化」には統計的に有意な結果が得られた。活動者の生活の変化には月並みではあるが、活動で得た知識や技能の応

用という日々の積み重ねが重要であると考えられる。

TT 藤野でも重要なキーワードとなる「ピークオイル」に関する質問については、石油を使わない生活に関しては82.1%の人が肯定的だと考えている。一方で、生活の質や効率が下がる可能性について挙げている回答も見られた。

また、テキスト分析の結果から「石油を使わない生活」が良い理由については、「つながり」という言葉と、「地域」「人」という言葉以外にも「自然」という言葉との関係を見てとることができた(図4)。このような結果が出た背景には、活動者には石油を使う生活＝都市生活というイメージがあり、また、その都市生活の負の面(お金への依存や希薄な人間関係など)を経験していることがあると考えられる。

コミュニティ、つながりという側面では、活動者同士のコミュニケーションが増えたと感じる人は85.7%に上っている。また、コアメンバーへの聞き取り調査でも、活動者あるいは自分自身がTT 藤野に参加してから変わったところについて、「人間関係」や「コミュニケーション」を挙げる人が多かった。

こうした「つながり」を生む要因として考えられるのは、「人との出会い」に対する「楽しさ」や「好奇心」といったものである。

岩手県旧山形町（現久慈市）と二戸市を訪ねて

川上 香（江戸東京たてもの園）

Visiting Yamagata-machi (merged with Kuji-shi)
and Ninohe-shi, Iwate Prefecture

Kaori KAWAKAMI, Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum

平成 24 年 11 月上旬に岩手県旧山形町（現久慈市）と二戸市を訪ねた。以下は出会った方から、食についてご教示いただいた内容を簡易にまとめたものである。

バッテリー村・荷軽部にて

旧山形町（現久慈市）は二戸と久慈の中ほどに位置する山間地である。山形町荷軽部木藤古集落は、通称「バッテリー村」と呼ばれている。30 年ほど前、都会の生活を追わず、それまでの村の生活を継承し、与えられた自然の恵みを活かして一人一品作ることを目標にバッテリー村は開村された。バッテリーとは、人力や水力を使った唐臼のことで、バッテリー村では今でも唐臼が穀物の調整作業に使用されている。村では古民家に宿泊し山村の伝統智を学ぶ体験プログラムを都会の人々に提供している。

村長の木藤古さんから「ホド」と呼ぶ囲炉裏で調理する、ホドモチについて教えていただい

た。ホドモチは、小麦粉を練ってオニグルミと黒砂糖を入れ、ホドの灰に入れて蒸し焼きにするマンジュウである（図 2）。焼きたてはパンのような食感で、餡の甘さが焼けた皮とよく合う。木藤古さんは、かつて山形町には馬追いがおり、彼らの携帯食ではなかったかという。

また荷軽部在住の 60 代女性は、ホドモチを学校の弁当にしたそうである。焼いたモチを懷に入れて、ひと肌で温度を維持し食べていた。同女性は、子どもの頃の食事について、朝はヒエとオオムギのメシ、昼はホドモチ、夜はソバかうドンが多かったと記憶している。バッテリー村付近は、ヤマセと呼ばれる夏の冷たい北東風のため、イネが実らない年も多く雑穀を栽培してきた地である。

女性の家ではイネも栽培していたそうだが、イネは食べた記憶があまりない。またイネをヒエと混炊するようになったのは、かなり後年だという印象を持っている。ソバも栽培しており、ヒエとソバが主食であった。ヒエは粉にし、お湯でといたものをトチの葉やカシワの葉などにのせ、網にのせて焼いて食べることもあった。夜のソバやウドンは、朝に粉を練っておき、煮干でだしをとった汁に味噌で味付けしたものに入れて食べた。味噌はダイズを味噌玉にし吊るして作るものと、ダイズを煮て塩を混ぜ、重しをせずに 2～3 ヶ月の間、毎日混ぜて作るものがあった。

味噌のたまりで味付けした汁に小麦粉の小さい饅頭「まめぶ」を入れたまめぶ汁（図 3）という郷土料理があり、冠婚葬祭に食べられた（た



図 1 バッテリー村のバッテリー小屋

まりは味噌から直接漉しとるのではなく、数年経った味噌に水を加えて煮て漉したものらしい。『聞き書岩手の食事』農文協 1984)。まめぶの中には黒砂糖とクルミが入っており、汁の具には野菜と自家製の豆腐が使われる。豆腐も以前は各家で石臼でダイズをひいて作っていた。

「湯かべ」といい、かたまりかけの豆腐をひしゃくで茶碗に移し食べることもあった。冬季に屋外で凍らせて水分をぬく「凍み豆腐」は食事に欠かせないものだったという。また、春には野山を焼き、5～6月頃出る山菜を収穫していた。今でもワラビやフキを多食するそうである。

後日、旧山形町に隣接する久慈市山根町の温泉施設で、荷軽部で聞いたダイズを煮て塩を混ぜ毎日かき回して作る方法でできたと思われる味噌を入手した。山根町の集落で作られた地味噌とのこと（図4）。全体に水分が多く、たまりとダイズが半々くらいの割合の味噌である。味噌汁を作ってみたところ、米麹味噌にくらべると塩分が強く独特の風味があり、少量で深い味わいが得られた。

二戸にて

二戸市は岩手県北の内陸にある山間地である。東北新幹線の停車駅であり、駅周辺は商業地となっている。駅近くの農産物直売所では野菜、果物、肉類、花き、農産物加工品が販売されていた。加工品の中でも雑穀を使ったパンや菓子類が多種類並んでおり、新旧の雑穀料理が人々の生活に取り入れられている（図5）。

二戸では、伝統食を守りソバや雑穀を使った料理を中心に提供する食の工房を営んでいる70代の女性を訪ねた。店で使う醤油も手作りで、数年前までは原料の小麦栽培もしていたそうである。かつてはブタを飼って繁殖させ子豚を売ったり、葉たばこを作ったりして現金収入を得たこともあった。

2町歩の畑にヒエ→オオムギ・コムギ→ダイズを2年3毛作で栽培した。ヒエは雑穀商に販売し、オオムギ、コムギ、ダイズは農協に販売した。雑穀商は近隣にいくつかあり、収穫した



図2 ホドモチ



図3 まめぶ汁



図4 久慈市山根町の地味噌

雑穀を栽培者から集めていったという。野菜やアワ・キビ・タカキビ・ソバ・ゴマ・エゴマは自家用に栽培していた。

工房でいただいた「へっちょこ団子」はタカキビ粉で作られた団子を使ったお汁粉である（図6）。二戸では11月に農作業の終わり「ニワ



図5 二戸駅近くの直売所で販売されていたゴマ・エゴマ・アマランサス入り「てんぽ」。てんぽは南部鉄器のてんぽ焼き器を熱し、小麦粉をといいて雑穀を混ぜたものを流し込んで挟み焼きにしたお焼きである。



図6 へっちょこ団子



図7 柳ぱっと

ジマイ」が祝われる。皆の助け合いや苦勞をねぎらって食べるのがへっちょこ団子であった。団子の中央にへそのようにくぼみをつけることと、苦勞したことを地元の言葉で「へっちょはいだ」と言うところから、へっちょこ団子と名がついたといわれるそうである。また、柳の葉の形に切ったソバを汁で煮込んだ「柳ぱっと」(図7)も食べたという。

わずか3日間の滞在であったが、道の駅で販売されている雑穀の量と種類の多さ、豆腐田楽のうまさ、カブのつけものを赤く染めるための色付けカブなど、様々なものが印象に残った。再訪し、農と食についてさらに勉強させていただけたらと願っている。

彩色園における農学校の始まり —ぬくい少年少女農学校—

西村 俊

(東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程(B類)理科専攻 卒業生
特定非営利活動法人自然文化誌研究会 運営委員)

Beginning phase of the Agricultural School in Saishikien

Shun Nishimura, Department of Chemistry, Tokyo Gakugei University (Graduated Student)
The Institute of Natural and Cultural History (Member of the Steering Committee)

はじめに

自然文化誌研究会(現NPO法人)は、東京学芸大学公開講座として、農山村のフィールドを活かした自然・生活体験活動「冒険学校」を開講していました(1-3期:五日市、4-5期:奥秩父、6-13期:中津川村)。14期冒険学校を開講する際に、新たなスタイルの生活体験活動へと挑戦するための一歩として、東京学芸大学構内の農場「彩色園」を利用したデイキャンプを開催しました。

そして、その翌年の2002年5月から、年間を通した食農体験活動への参加によるナチュラリストの育成を目的に、東京学芸大学公開講座「ぬくい少年少女農学校」を新たに開講させました。それまでの冒険学校の活動スタイルを引き継ぎながら、大学の農場(彩色園)をフィールドとしてどのように農学校の活動が展開されてきたのか。ここでは、彩色園における農学校の始まりとして、「ぬくい少年少女農学校」の活動を紹介したいと思います。

2002年度 第一期

冒険学校時代を知らないメンバーが多く、スタッフも参加者も本当にみんなが「勝手がわからない」という手探りの状態からのスタートでした。毎回、参加者が農学校を楽しみに参加してくれるのは嬉しいのだけれど、活動前にはいつもスタッフが必死になってプログラムを練っ



図1 新たな活動の舞台「彩色園」



図2 パン釜作り(第一期)

ていました。農学校の歴史の中でも、創成期ならではの「参加者との接し方や働きかけ、農学校とは何だろうか!」という議論をたくさん交わした時代だったように思います(この議論は



図3 基地作り（第一期）



図5 初めてのごぼうの収穫に苦戦（第二期）



図4 バームクーヘン作り（第一期）



図6 小菅村でのそば打ち体験（第二期）

農学校 13 年目の 2013 年現在もなお続いているのではないでしょう（か）。

畝^{うね}を立てるのにも一苦労の種まきから始まり、ほおの葉でのちまき作り、泥んこの田植え、ミクロハイクを使った彩色園の地図作り、基地・パン釜作り、太い竹を使ったバームクーヘン作り、身近な野菜（玉葱の皮、茄子の皮、トマト）を使った染め物Tシャツ作り、鍋パン作り、芋版、芋煮会、正月飾りなどなど盛りだくさんの1年。木俣先生（カツンボ）、原子先生（アトム）のアイデアや助言に助けられながら、何とかやり遂げたぞ!!!という1年でした。（参加者 17 名、スタッフ 25 名）

2003 年度 第二期

1 年目のスタッフは主に東京学芸大学 F 類環境教育の学部生が中心となっていた農学校ですが、2 年目には大学院生・社会人・他大学の学生とスタッフのバリエーションも多様化し、より多彩な活動となりました。夏には、山梨県小

菅村への宿泊キャンプも企画。1 年目と比べても、飛躍的に忙しさが増した年でした。

この年の思い出といえば、失敗の連続…。高くし過ぎた畝のおかげで強風によりトウモロコシの苗が倒れ、もち米の蒸かし加減が分からずにべちょべちょのお餅つき、白菜とのらぼうは冬の霜と鳥たちに根こそぎ食べられ、ほとんど収穫できませんでした。「農学校なのだからもっと畑・田圃への関わり方を強めよう！」と畑作りや田畑の手入れに重点を置いた年だったのですが…。失敗は成功の肥やしとはよく言ったもので、この年の失敗談は今でも強く記憶に残っています。

大豆からの豆腐作り、収穫祭（野菜料理大会）、どろんこ稲刈り、小菅村での文化体験（夏季の農山村宿泊体験活動）、樹木の葉を使った染め物、竹を切ったの流しそうめん、腐葉土作り、注連縄作りなど、急激に活動を拡張した年でした。（参加者 14 名・スタッフ 30 名）

2004 年度 第三期

この年は、定員の25名をはるかに超える応募（41名）がありました。せっかく活動をしているのだから出来るだけ多くの子どもを参加させたい！という想いで、田畑をさらに拡張して、大人数を想定した活動計画・スタッフ配置を考えて、2013年現在の農学校までを考えても、この2004年度が最も大きな規模の農学校を運営した年なのではないかと思います。そして、規模の大きさにさらに翻弄された年になりました。活動日は全部で10回、宿泊も2回（夏と冬）に増えました。

活動の新しいアイテムとなったのが「スケッチブック」。その日の活動内容や気が付いたこと、感じたこと、疑問に思ったことなどを絵や言葉、写真や押し花などで書きました。次の活動の時には、前回の振り返りを配って貼ることで、農学校の年間の活動のつながりをより強く感じられるアイテムとなったと思います。

檜原村の山の中まで活動用の間伐材を取りに行つての木工・薪割り・東屋づくり、アイヌの浦川治造さんをお招きしてのアイヌ料理体験（夏季の彩色園での宿泊）、本物の農家の現場を見学（参加者より背丈の高い野菜に囲まれて、職人技に感動）、太陽光でお風呂を沸かそうプロジェクト、夕顔でのかんぴょう作り、創作料理大会、ジャンボカステラ作り、「植物に名前を付けよう！」プログラム、鮭のチャンチャン焼き作り、竹で水鉄砲作り、新しい活動プログラムがたくさん生まれた年でもありました。活動写真の数は、なんと過去最多の2570枚もありました。（参加者30名、スタッフ40名）

「ぬくい少年少女農学校」から新たなスタイルへ

農学校で初めて包丁を握った人、野菜嫌いだけれどちょっとずつ食べられるようになった人、学校や年齢の枠を超えた仲間ができた人、土に触れるようになった人、昆虫に触れるようになった人、ちょっとお父さんお母さんから自立し始めた人、子どもと接するのが平気になった人、人前で喋れるようになった人、たくさんの参加者・スタッフの成長の場となった「ぬく



図7 小金井市の農家訪問（第三期）



図8 ジャガイモの収穫（第三期）



図9 アイス作り（第三期）



図10 玉ねぎの皮を使った染め物（第三期）



図 11 集合写真（第三期）



図 12 夏季収穫祭の成果（第二期）

い青少年農学校」。

「種から胃袋まで」（中尾佐助）の体感をテーマとした3年間の生活体験活動には、のべ人数159名（参加者61名、学生スタッフ数98名）の人々が携わりました。

しかし、活動が続けていく中で、農作業、文化体験、調理、安全管理、多くの面で規模とスタッフの力量・容量との兼ね合いに課題を感じ始めていました。たくさんの年齢の子どもや大人が同じ場に居るほど、活気がある疑似社会ができる。しかし、今の慌ただしい形態が農学校のコンセプトに合っているのだろうか。そんな疑問を持つ声も少なくありませんでした。

農学校のテーマは何だったのか？ 何を伝え、何を感じてほしいのか？ その初心に立ち返るために、農学校は「ぬくい青少年農学校」から新たな形の農学校へと歩むことになりました。

ちえのわ農学校へ

もっと参加者との関係を深めながら、一人一人の成長に寄り添える活動をしたい。農学校の枠を超えた発展的な活動を目指して、「ぬくい青少年農学校」のスタッフが中心となって2004年夏に立ち上げたのが環境教育実践サークル「ちえのわ」です。「ちえのわ」では、「種から胃袋まで」の体験と昔ながらの知恵や文化に触れることで、「自然＝命のつながり」の中の自分を感じることに重点を置き、より身近な視点から農耕文化基本複合を用いた食農体験学習を進めています。

その活動の中で「ぬくい青少年農学校」も新たに「ちえのわ農学校」として継承されました。2013年の現在では「第9期ちえのわ農学校」も開校し、農学校は通算13年目の活動を今も歩み続けています。

* 本稿は、自然文化誌研究会「冒険学校の歩み」に掲載予定の原稿（2011年2月執筆）の一部を再構・追記したものです。

東京都小金井市の市民農園と江戸野菜の復活に関わる市民意識

木保 美樹男（東京学芸大学環境教育研究センター）

The Awareness of Citizens on Community Gardens and the Revival of Edo Vegetables in Koganei-shi, Tokyo

Mikio KIMATA, Field Studies Institute for Environmental Education,
Tokyo Gakugei University

1. はじめに

栽培植物の在来品種の種子を保存するためには、研究機関で保存する方法と農家が保存する方法がある。研究機関の施設による保存は緊急避難として重要であるが、種子貯蔵庫に入れた時点で在来品種としての小進化が止まる。これまで雑穀や野菜を中心に栽培植物の生物文化多様性の調査研究をし、大学において種子・標本の収集・保存（生息域外保全）をしてきたが、小規模自給農耕が在来品種の小進化を止めることなく、実質的に多様な在来品種種子を保存（生息地保全）し、家族の食料自給に役立っていることが見えてきた。

生物多様性条約第10回締約国会議において提言したように、生物多様性には文化多様性が伴っている（木保 2011, 2012）。野生植物であれ、栽培植物であれ、生物文化多様性は自然や農耕地の現場における保全が重要である。不安定な地球環境と国際社会、自然災害と人為災害に応じて、エネルギー転換や生活様式の移行（トランジション）が求められ、生物文化多様性保全と食料安全保障を確実にするために、自給農耕の場であるホームガーデンでの自家採種により、適応進化による地域固有の種、在来品種をよく維持してきたことが最近のヨーロッパを含めた調査研究によって次第に明らかになってきた（Cotton 2002）。

ホームガーデンにおいて地域固有の在来品種（遺伝資源種子）を確保し、家族と地域社会を守るための自給農耕によって食料安全保障を実現する可能性を調査研究する必要がある（西川 2012）。また、アメリカやオーストラリアの

ような大規模農業を目指してきた中央政府による農業政策および国際食糧会社によるグローバル化やコモディティ化に依存しすぎず、市民による小規模自給農耕の有効性を検証して、政策提言に結び付けたい（野坂 2000、中村 2004、山下 2004）。基礎研究に基づいて政策提案することは研究者の責任の範囲にあると考える。

生物文化多様性保全は国際および国家的な事業でもあるが、実際には小規模農家や市民レベルでの生物文化多様性の農耕地保全活動が重要である。自給農耕による生物文化多様性保全、家族の食料安全保障、これらによる実自給率の増加の可能性と有効性を明らかにする必要がある。

日本の市民農園のレベルとは異なって、欧米のホームガーデンは面積も広く、食料自給に大きく貢献している。たとえば、ソ連崩壊後の政治的混乱期においてもダーチャ（自給農耕地）があったので、餓死者はおらず、家族食料安全保障は機能した。ロシアのジャガイモの大半はダーチャで生産されているという（豊田 2005）。さらに、環境学習（CEPA 伝達・教育と公共意識）により、市民による新しい公共性の考え方を提示し、普及・啓発する。市民による新たな公共は税金によらない任意の寄附などに基づき、行政に依存しすぎず、市民自ら公共のために作業することと理解する。このような社会的共通資本（宇沢 2000；宇沢弘文・内橋克人 2009）への市民の参加、新しい公共のあり方を現場での基礎研究の中から検討したい。

市民の側の自助に重きを置く公共の視点は日

本ではこれまで弱かったものであり、今後なくてはならないものになる。ヨーロッパは市民革命を経ているので、市民主体の公共、社会的共通資本への意識が深くあり、市民自ら生物文化多様性を保全し、クラインガルテンなどの市民農園で自給農耕を楽しみながら、食料安全保障を確実にし、居住困難地には直接保障をして、地域自治を尊重している。

本論では、まず首都の衛星都市である小金井市の市民農園などにおける栽培植物の種、品種の多様性、とりわけ江戸野菜の復活活動、および食料自給に関する実態調査を行い、家族と地域レベルでの食料安全保障の可能性を検討する。

2. 市民農園に関わる法律

桜井(1994)によれば、約20年前のデータではあるが、東京都では「市民農園に対する援助を希望する農家は少なかった(15.8%)」。この理由は、農地の土地資産としての収益性が極めて高いので、農家は農地を自己所有のまま宅地並み課税に相当する固定資産税を支払うことができ、所有地の一部を収益性の高い賃貸住宅や駐車場などとして運用すればよかった(東京都「都市農業施設に関する意向調査の概要」1992)。

営農困難な農地は市民農園などとして活用することが望ましいが、民間所有の農地を利用した市民農園を普及するには相続税問題の解決が必要であったので、国の相続税納税猶予制度が望まれていた。都内の市民農園は普及半ばで、利用できる区画が狭く、また、区画数も面積も著しく不足しており、応募倍率は高い現状にある。練馬区は農協が運営するレジャー農園と区が農家から借地して開設している区民農園が47か所あり、区条例を定めて積極的に市民農園制度を進めてきた。

しかし他方で、都市化や農山村の過疎・高齢化など社会的環境の著しい変化にともない、農地法や生産緑地法が度々改正されてきた。農林水産省は「食料・農業・農村基本計画」(閣議決定2005年)の中で、市民農園を「都市と農

村の交流の促進」、「都市およびその周辺の地域における農業の振興」に資する取組と位置付け、市民農園の開設の要件を緩和するなど、農地の利用機会の拡大を図ってきた。特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律(1989、改正2005)および市民農園整備推進法(1990)が整備されたことにより、市民農園の開設は条件付きながらいくつかの許可が不要あるいは可能になり、相続税納税猶予制度など、農家や自治体にとってもメリットが多くなった。この報告書には、市民農園の設置状況、利用料金の状況、運営・管理に関するアンケート調査結果、先進的な事例などが紹介されている(農林水産省関東農政局2006)。

3. 調査対象地

東京都小金井市には91ヘクタールの農地(市面積の約8%)があり、このうち75ヘクタールが生産緑地となっている。193戸の農家のうち、112戸が販売農家で、直売所(65戸)や地元スーパーマーケットに出荷している(地域計画研究所2009)。上述の桜井(1994)によれば、農地の半分近くが植木畑という特徴がある。

小金井市農業委員会の市民意向調査によると、地域環境保全(63.3%)と新鮮野菜の供給(53.6%)が高い回答であった。この他に、農業体験や環境教育の場、市民農園の利用が強く望まれていた。生産緑地地区の指定を希望しない農地に関しても、農家の営農意欲が高いので、農地を市に市民農園・学校農園として貸付する場合は宅地並課税額を軽減する制度を望む回答(72%)が多かった。

三鷹市・小金井市地域活用プロジェクト検討委員会は、リーディングプロジェクトの一つとして「江戸東京野菜創・再生プロジェクト」を提案し、江戸東京野菜と郷土料理の復活を図り、栽培体験、食体験の機会を提供することにした(三鷹市・小金井市・東京都2006)。この検討委員会に先立って、小金井市公民館貫井南分館ではNPO法人ミュゼダグリの企画提案により、講座「小金井を江戸野菜で元気に」(2004)の学びの成果をふまえて、東京学芸大学環境教

育研究センター彩色園の農地を利用して（木俣 2012）、成人大学講座「江戸野菜をつくろう」を 2005 年から開始し（公民館貫井南分館 2005）、現在（2013）まで継続している。ミュージダグリに、東京学芸大学の学生サークル・ちえのわ農学校が協力して、江戸東京たてもの園の野外展示農家の傍らにも畑を借用し、見本園を造った。たてもの園でのイベント「江戸の小正月」（2007）では、伝統小松菜、亀戸大根の江戸雑煮、山梨県小菅村産（NPO 自然文化誌研究会／植物と人々の博物館雑穀栽培見本園）のアワ入りおむすびなどを提供した。

ここでいう江戸野菜は、京野菜のように明確な基準に基づいて定義されておらず、江戸時代に江戸・江戸近郊で栽培されていた野菜、明治時代初期にヨーロッパから導入され、東京発となった西洋野菜とされている。主な野菜は、亀戸大根、練馬大根、大蔵大根、金町小かぶ、東京長かぶ、馬込大太三寸人参、谷中しょうが、滝野川ごぼう、伝統小松菜、芯とり菜、のらぼう菜、下山千歳白菜、新宿一本ねぎ、馬込半白節成きゅうり、奥多摩わさび、東京うど、後関晩生べかな、三河島菜、三河島枝豆、八丈おくら、小笠原かぼちゃ、関野栗などである（小金井市農業委員会 1989；タキイ種苗（株）出版部 2002；大竹 2009a, 2009b；高橋栄一 2008）。

4. 調査および解析方法

小金井市の市民農園の利用者、東京江戸野菜を使用している食堂、小金井市貫井南公民館成人大学講座「江戸野菜をつくろう」参加者に対して、直接手渡しによる質問紙法により（100 通）、2012 年 12 月に構造化調査を実施した（付表）。回収された質問紙調査票のデータは EXCEL に入力後（有効回答数 58、回収率 58%）、IBM-SPSS ver.21 を用いて、基礎統計、偏相関分析、主成分分析、因子分析、および重回帰分析を行った。

自由記述に関しては、同解析ソフトの Text Analytics for Surveys ver.4.0.1 により、テキスト分析を行った。また、市民農園関係者 6 名に対しては市民農園用自由記述質問紙（半構造化）

により、2 名に対しては直接面接聴取（フリートークング）を行い、市民農園の実状について意見を聞いた。さらに、「小金井環境フォーラム」（2013 年 2 月）において活動紹介ポスターの展示期間（7 日間）に、同じアンケート用紙を置き、参観者に対する調査を試みたが、返送用封筒がすぐに紛失し、有効回答数 2 を得たに過ぎなかったため、この解析はできなかった。その後、第 32 回環境教育セミナー（2013 年 3 月）の参加者（40 名）に対して同じアンケート用紙を配布し、有効回答 12（回収率 30%）を得たため、これらの結果は補論として別に報告する。

5. 調査結果

調査対象者の属性および江戸野菜に関する回答を表 1 にまとめた。回答者は男性 32 名（55.2%）、女性 24 名（41.4%）であった。年齢層は 60 歳代が 29 名（50%）で半数を占め、ほかは 70 歳代（25%）、50 歳代（12.1%）、40 歳代・30 歳代（ともに 5.2%）、20 歳代（1.7%）の順であった。消費者は 33 名（56.9%）、生産者は 2 名（3.4%）、その他 17 名（29.3%）は市民農園利用者と考えられる。

江戸野菜についてはほとんど（91.4%）が認識しており、江戸野菜の存在を知ったのは大方が 3～5 年前で、江戸野菜に関するイベントには 21 名（36.2%）が参加し、江戸野菜の復活に改善のための意見を 23 名（39.7%）がもち、江戸野菜の生産と消費に関しては大方（68.9%）が継続したいとしている。

江戸野菜の復活について知った契機は、表 2 に示したように、小金井市報を読んで（41.2%）、知人から聞いて（13.2%）が半数以上を占めていた。農地で栽培されているのを見て（7.4%）もあったが、八百屋の店頭や食堂のメニューで見て（ともに 2.9%）は少なかった。江戸野菜を選ぶ理由は、表 3 に示したように、地元の農家を応援できる（19.4%）が最も多く、続いて 10%以上の回答は、地域を活性化できる、旬のものが食べられる、新鮮である、生産者の顔が見えて安心、味が美味しい、などであった。食料自給率の向上（7%）と価格が安い（1.6%）

表1 調査対象者属性および江戸野菜への回答（有効回答数 58）

項目	事項 回答数、%
性別	男性32(55.2%)、女性24(41.4%)、不明2(3.4%)
年齢層	20代1(1.7%)、30代3(5.2%)、40代3(5.2%)、50代7(12.1%)、60代29(50.0%)、70代15(25.9%)
消費者／生産者	消費者33(56.9%)、生産者2(3.4%)、その他17(29.3%)、不明6(10.3%)
江戸野菜	知っている53(91.4%)、知らない5(8.6%)
いつ知ったか	5年以上前22(37.9%)、5～3年前12(20.7%)、3～1年前15(25.9%)、1年以内4(6.9%)、半年以内1(1.7%)、不明4(6.9%)
江戸野菜イベント	参加した21(36.2%)、参加していない23(39.7%)、不明7(12.1%)
江戸野菜の改善	ある23(39.7%)、ない23(39.7%)、不明12(20.7%)
消費／生産の継続	とても思う18(31.0%)、思う22(37.9%)、普通8(13.8%)、あまり思わない2(3.4%)、思わない0(0%)、不明8、平均 4.10±0.83

表2 江戸野菜を知った契機

項目	回答者数(%)
農地で栽培されているのを見て	5(7.4%)
八百屋などの店頭で見て	2(2.9%)
食堂のメニューで見て	2(2.9%)
小金井市報を読んで	28(41.2%)
駅の掲示を見て	0(0%)
市の掲示板のチラシを見て	4(5.9%)
配布されたチラシを読んで	2(2.9%)
知人から聞いて	9(13.2%)
その他	16(23.5%)
合計 重複回答あり	68

表3 江戸野菜を選ぶ理由

項目	回答者数(%)
生産者の顔が見えて安心である	16(12.4%)
価格が安い	2(1.6%)
旬なものが食べられる	18(14.0%)
新鮮である	17(13.2%)
地元の農業を応援することができる	25(19.4%)
味が美味しい	15(11.6%)
地域を活性化することができる	18(14.0%)
食料自給率の向上が見込める	9(7%)
その他	9(7%)
合計(重複回答あり)	129



図1 市民農園の初夏（上）と初秋

は回答者が少なかった。

回答者が知っている江戸野菜の種・品種については表4に示した（重複回答あり）。江戸野菜としてもっともよく知られている野菜は小松菜（35名）で、亀戸大根（25名）、のらぼう菜・金町小かぶ（ともに17名）、半白きゅうり（15名）、東京長かぶ（14名）、東京うど（12名）、大蔵大根（11名）などであった。あまり知られていない江戸野菜もあったが、回答者によっては、少ないながら、東京産であれば江戸野菜であると認識していた。

他方、市民農園（栗山80区画、12m²）で栽培されていた主な野菜は、ダイコン（61名、76.3%）、ホーレンソウ（53.8%）、ブロッコリー（47.5%）、ハクサイ（36.3%）、シュンギク（33.8%）、レタス（32.5%）、カブ・キャベツ（ともに27.5%）、カリフラワー（25%）、ネギ（21.3%）などであった。1区画当たりの栽培種数は、2～14の範囲で、平均値は6.31であった（図1）。

表4 知っている江戸野菜の種・品種および市民農園(80区画)で栽培されている野菜の種・品種

回答数	江戸野菜の種・品種	栽培者数(%)	栽培野菜の種・品種 1)
35	小松菜	61(76.3)	ダイコン
25	亀戸大根	43(53.8)	ホーレンソウ
11	大蔵大根	38(47.5)	ブロッコリ
8	練馬大根	29(36.3)	ハクサイ
3	だいこん	27(33.8)	シュンギク
17	金町こかぶ	26(32.5)	レタス
2	こかぶ	22(27.5)	カブ、キャベツ
14	かぶ	20(25.0)	カリフラワー
14	東京長かぶ	17(21.3)	ネギ
17	のらぼうな	15(18.8)	コマツナ、ミズナ
15	半白きゅうり	14(17.5)	ニラ
2	滝野川にんじん	11(13.8)	ニンジン
9	三寸人参	10(12.5)	チンゲンサイ
11	にんじん	8(10.0)	アブラナ
12	東京うど	6(7.5)	ノザワナ
9	東京べかな	5(6.3)	ジャガイモ、メキャベツ
7	しんとりな、寺島なす、谷中生姜	4(5.0)	カソオナ、コマツナ、トウガラシ
5	まくわうり	3(3.8)	イチゴ、タイサイ、チュウゴクヤサイ、ナス、パ ジル、ハツカダイコン、ピーマン
4	千住ねぎ		
2	拝島ねぎ		
3	ねぎ		
4	滝野川ごぼう		
1	日本ほーれんそう		
3	ほーれんそう		
3	内藤とうがらし		
2	じゃがいも	2(2.5)	コネギ、セロリ、ワケギ
1	早稲田みょうが、関野栗、しゅんぎ く、きゃべつ、かりふらわー、日本か ぼちゃ、奥多摩わさび、三浦大根、 ぶろっこりー、明日葉、竹の子、馬 込なす、ちんげんざい、ざつまいも ざにーれたす、はくさい、とうもろこ し、えだまめ、れたす	1(1.3)	アスパラガス、アップルミント、エンドウ、オレ ンジミント、カボチャ、キョウナ、ケール、コカ ブ、ゴボウ、サトイモ、シシトウ、シソ、ショウゴ インダイコン、ショクヨウキク、スイゼンナ、 タマネギ、チコリ、トマト、ナガイモ、ノラボウ ナ、パセリ、花キク、ハボタン、マリーゴールド、 ミウラダイコン、ミツバ、ラッキョ、レモンバ ウム
		17(21.3)	トンネル栽培で実生のため、同定できず不明

1)栽培種数平均 6.31±2.63、範囲2~14、東西畝/南北畝=68/12

各質問項目に対する5段階評価を表5に示した。質問 a1 江戸野菜の認知時期は、平均値 3.93 で、おおよそ5年から3年の範囲であった。質問 a4 江戸野菜の生産消費の継続については、平均値 3.90 で、積極的である。

質問 b1 地域に自然が多いかについては、平均値 3.78 で、回答者によって評価は分かれるが、良好な評価である。質問 b2 都市農業に関心が

表5 質問項目の5段階評価の平均値

質問項目	平均値
a1江戸野菜の認知時期	3.93± 1.08
a4江戸野菜の生産消費の継続	3.90± 1.10
b1地域自然多い	3.78± 0.79
b2都市農業に関心	4.20± 0.91
b3地産地消に関心	4.18± 0.75
b6都市農地保全のための市民農園	4.39± 0.78
b7家族や地域の食料安全保障	4.25± 0.88
b8市民農園増設	4.64± 0.62
b83市民農園の貸借面積	2.65± 0.86
b84市民農園の使用料金	3.10± 0.56
b9農地に関する法律・条例の存在	3.09± 1.12

表6 質問事項における偏相関分布

	a4	b1	b2	b3	b6	b7	b8	b83	b84	b9
a4江戸野菜の継続	1	0.263	0.410*	0.603**	0.293	0.247	0.382*	0.042	0.059	0.059
b1地域自然多い	0.263	1	0.049	0.019	0.396**	0.220	0.101	-0.031	-0.088	-0.170
b2都市農業関心	0.410**	0.049	1	0.762**	0.345*	0.471**	0.318*	0.183	-0.284	0.141
b3地産地消関心	0.603**	0.019	0.762**	1	0.340*	0.407**	0.315*	-0.349*	-0.311*	0.093
b6都市農地の保全	0.293	0.396**	0.345*	0.340*	1	0.589**	0.316*	0.049	0.007	-0.253
b7食料安全保障	0.247	0.220	0.471**	0.407**	0.589**	1	0.294	0.171	-0.117	-0.151
b8市民農園増設	0.382*	0.101	0.318*	0.315*	0.316*	0.294	1	0.125	0.223	-0.040
b83市民農園面積	0.042	-0.031	-0.183	-0.349*	0.049	-0.171	0.125	1	0.413**	-0.120
b84市民農園料金	0.059	-0.088	-0.284	-0.311*	0.007	-0.117	0.223	0.413**	1	-0.532**
b9農地法律	0.059	0.170	0.141	0.093	-0.253	-0.151	-0.040	-0.120	-0.532**	1

表7 多変量解析の結果概要

1) 主成分分析

成分	主成分スコアの分	累積寄与率
1	3.497	31.787
2	2.220	51.973
3	1.222	63.079

成分		
	1	2
江戸野菜認知	-0.467	0.419
江戸野菜の継続	0.646	0.247
地域自然多い	0.142	0.489
都市農業関心	0.844	-0.033
地産地消関心	0.849	0.009
都市農地保全	0.455	0.659
食料安全保障	0.649	0.351
市民農園増設	0.517	0.311
市民農園面積	-0.480	0.494
市民農園料金	-0.459	0.609
農地法律	0.267	-0.689

2) 重回帰分析

モデル	重相関係数R	F検定	有意確率
1	0.829	7.058	0.000

	標準化係数	検定	偏相関係数
13 江戸野菜認知	-0.216	-1.727	-0.292
4 江戸野菜の継続	-0.179	-1.127	-0.195
b1 地域自然多い	0.065	0.512	0.090
b2従属変数			
b3 都市農業関心			
b6 地産地消関心	0.791	4.411	0.615**
b7 都市農地保全	-0.020	-0.142	-0.025
b8 食料安全保障	0.207	1.562	0.266
b83 市民農園増設	0.048	0.388	0.068
b84 市民農園面積	0.164	1.225	0.212
b9 市民農園料金	0.014	0.085	0.015
b9 農地法律	0.140	0.995	0.173

モデル	重相関係数R	F検定	有意確率
2	0.695	2.982	0.009

	標準化係数	検定	偏相関係数
13 江戸野菜認知	0.027	0.161	0.029
4 江戸野菜の継続	0.069	0.332	0.059
b1 地域自然多い	-0.049	-0.303	-0.054
b2 都市農業関心	0.343	1.562	0.266
b3 地産地消関心	-0.164	-0.564	-0.099
b6 都市農地保全	0.458	2.831	0.448**
b7従属変数			
b8 食料安全保障			
b83 市民農園増設	0.120	0.759	0.133
b84 市民農園面積	-0.194	-1.120	-0.194
b9 市民農園料金	-0.129	-0.615	-0.108
b9 農地法律	-0.164	-0.904	-0.158

あるかについては、平均値 4.20 で、関心は高い。
 質問 b3 地産地消に関心があるかについては、
 平均値 4.18 で、これにも高い関心を示している。
 質問 b6 都市農地の保全に市民農園は役立つか

については、平均値 4.39 で、市民農園をかなり
 高く評価している。

質問 b7 都市農地や市民農園は災害などの際
 に、家族や地域の食料安全保障に有効かについ

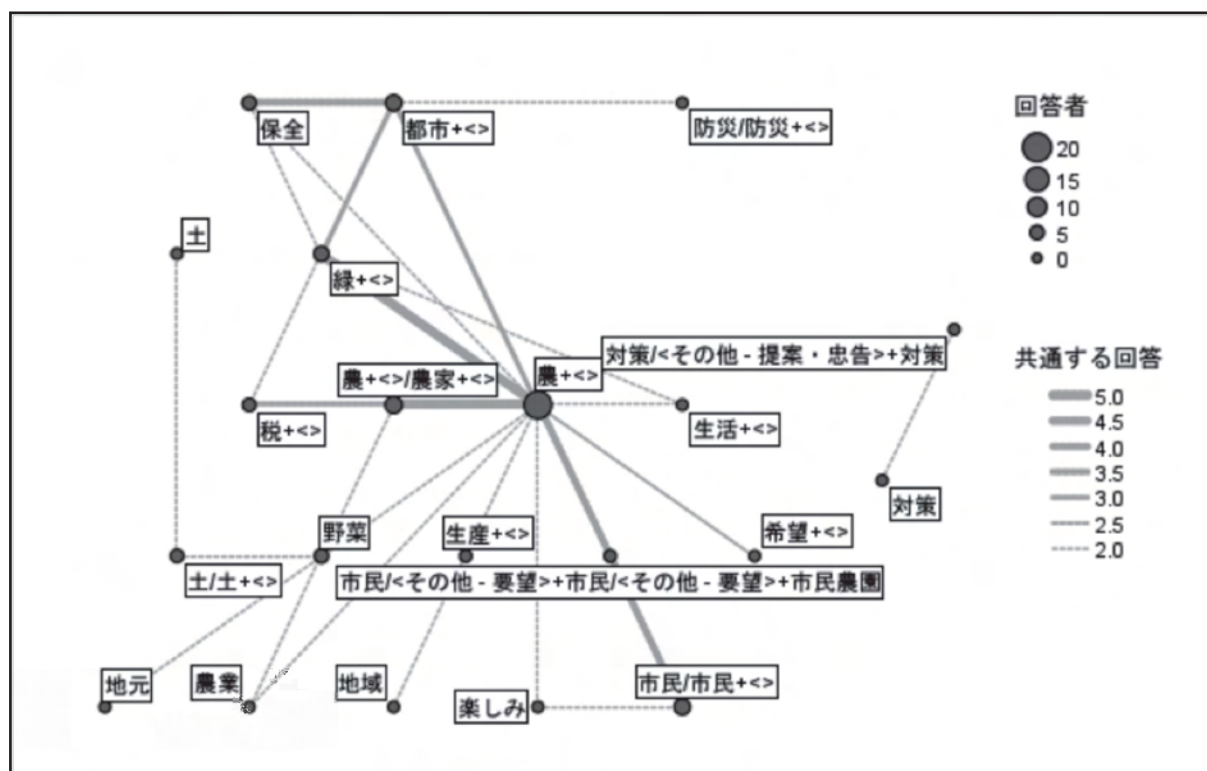


図2 質問 b5 都市農地の保全についての意見のテキスト分析 (有効回答数 31)

ては、平均値 4.25 で、高い期待が示されている。質問 b8 市民農園の増設については、平均値 4.64 で、とても高い要望を示していた。質問 b83 市民農園の貸借希望面積については、平均値 2.65 で、おおよそ 30m² から 15m² の範囲が求められていた。質問 b84 市民農園の使用料金については、平均値 3.10 で、おおよそ 5000 円程度が望まれている。質問 b9 農地に関する法律・条例の存在については、平均値 3.09 で、内容まで含めて十分に知られてはいなかった。

各質問事項の間の偏相関分析の結果を表 6 に示した。質問 a4 江戸野菜の継続を望むに対して、1%または 5% レベルで有意な正の相関係数を示したのは、都市農業と地産地消に関心、市民農園の増設であった。

質問 b1 地域に自然が多いは、都市農地の保全と有意な相関係数を示した。質問 b2 都市農業への関心は、江戸野菜の継続、地産地消への関心、都市農地の保全、食料安全保障、市民農園の増設と正の有意な相関係数を示したが、一方、市民農園の面積と料金に関しては負の相関

係数を示した。質問 b3 地産地消への関心は、江戸野菜の継続、都市農業への関心・保全、食料安全保障、市民農園の増設が有意な正の相関係数を示し、市民農園の面積・料金が負の相関係数を示した。質問 b6 都市農地の保全は、地域に自然が多い、都市農業・地産地消への関心、食料安全保障、市民農園の増設と有意な正の相関係数を示した。

質問 b7 は都市農業・地産地消への関心、都市農地の保全と有意な正の相関係数を示した。質問 b83 市民農園の面積は、市民農園の料金と有意な正の相関係数を示し、他方、地産地消への関心とは有意な負の相関を示した。質問 b84 市民農園料金は、市民農園の面積と有意な正の相関係数を示し、他方で、地産地消への関心、農地に関する法律とは有意な負の相関を示した。質問 b9 農地に関する法律は、市民農園の料金と有意な負の相関を示した。

多変量解析の結果を表 7 に示した。主成分分析における、第 1 主成分は、江戸野菜の継続、都市農業および地産地消への関心、食料安全保

障に関わるので、地域での食料生産を示している。第2主成分は、都市農地の保全、市民農園料金、農地法律に関わるので、都市農地の保全政策を示している。因子分析は有意な解析ができなかったので採用しなかった。重回帰分析では、従属変数を都市農業への関心としたモデル1では、地産地消への関心のみが1%レベルで有意であった。また、従属変数を食料安全保障としたモデル2では、都市農地保全のみが1%レベルで有意であった。

自由記述を求めた質問は、質問 b5 都市農地の保全についての意見（有効回答数 31）、質問 b8 市民農園を増やしたほうが良い理由（有効回答数 31）、および質問 b10 市民農園についての意見（有効回答数 26）であった。これらの自由記述文に関して、テキスト分析（感性分析のみ）を行い、有効回答数と記述文量が多い質問 b5 の結果について、カテゴリを視覚化し、共通する回答を 2 から 5 として図 2（グリッド・レイアウト）に示した。

質問 b5 に用いた語彙「都市、農地、保全」以外で、多く抽出された語彙のカテゴリは「市民（7）、緑+<>（6）、野菜（5）、税+<>（4）、土（4）」であった。これらの語彙以外に、少数ながら共通する回答 2 以上で、「地元・地域、楽しみ、希望、生産、生活、防災」などがあった（図 2）。

質問 b8 に用いた語彙「市民農園」以外で、感性分析によって多く抽出された語彙のカテゴリは「野菜（9）、自分（6）」であった。「野菜」と「自分」は共通する回答（4）で相互関係が示された。このほか少数ながら共通する回答には、「美味しさ、食料、人、交流+<>、コミュニケーション、倍率、12m²、将来、地球規模」などがあった。

質問 b10 に用いた語彙「市民農園」以外で、感性分析によって多く抽出された語彙のカテゴリは「農地（8）、野菜（5）、農家+<>（5）、農業（4）」であった。カテゴリ「市民農園」に対して、共通する回答（2）のカテゴリは「野菜、農地、農家+<>、交流、多くの人、市民、住宅、

一区画、市」であった。共通する回答ではないが、「市民農園」に関して、「地域、宅地化、なくなってしまう、倍率、一期、生活、健康維持」などのカテゴリが示された。

市民農園やホームガーデンに関わってきた調査回答者 6 名の平均農業経験年数は 13.5 年、これらのうち 2 名は有機農業を行っている。種子の入手先は、農協、中小種苗店やホームセンターで購入、郷里から分譲、自分で育苗する人もある。肥料は大方の人が購入していた。栽培面積は 3m² ~ 120m² と範囲が広い。四季を通じて野菜の多くの種・品種を栽培している。品種の選択は、耐病性、接ぎ木、栽培が簡単、季節に適合する品種であり、在来品種を選んではいない。在来品種の保存の意義は良いこと、大事なこと、固定種の方が高く売れる、伝統野菜を継続してほしい、しかし、これらは栽培しにくいという意見もあった。

聞き取り調査の結果を次に要約する。1) 自給農耕での作付け品目は、家族の喜ぶ品目となり、ホーレンソウやジャガイモになる。買った方が安い野菜でも、栽培し、近所の人々に分かち合うことが楽しい。2) 小金井市には市民農園が 7 か所しかなく、土地の条件が悪い場所もある。応募倍率は 4 ~ 5 倍にもなる。高齢者が増えると市民農園の需要が増すが、土地を提供する農家は少ない。3) 農家は 126 戸、うち造園が 36 戸、果樹組合も 36 戸である。農業は経営が引き合わないの、同情はするが、農家は不動産業を兼業し、市民農園は農家の税金対策という一面もある。行政は農地保全よりも、人口を増やして、税金収入の増大を図りたい。したがって市民農園には農地保全などという理念がない。農家と市民との対立の構図ができていく。4) 市民農園の栽培技術の高さは、研修会が行われていないにもかかわらず、指導員や長年ホームガーデンを行ってきた人が教え、市民農園貸借者間で教え合うことで、保たれていた。5) 在来品種を継承した方が良いが、栽培しても加工、調理されなければ、品種の多様化は望

めず、保存も困難になる。在来品種を残すには、需要を作り出す必要がある。6) 日々の暮らしに流され、四季を忘れ、身近なものも疎くなったしまった。7) 農家を保護しすぎているので、TPPに賛成である。グローバル競争は避けられないので、高品質の農産物を作れば売れる。それでも農業に保護は必要であり、食料は例外である。8) 練馬区は市民農園の面積も広いし、抽選に当たる確率も高い。生きがい、生きる意味を考える時代である。

6. 考察

自給農耕にもいくつかの類型がある。たとえば、1) コミュニティーガーデン、クラインガルテン、市民農園などのような地域社会の中に位置付けられるもの、2) ホームガーデン、キッチンガーデン、ダーチャなどのように家族に属するもの、3) 1995年農業センサスによる副業的農家、4) 山村の小規模自給農耕のような伝統的生業（農林業複合の一部分）を構成するもの、などである（農文協 1989, Eyzaguirre and Linares 2004）。

本論は第1類型の市民農園を主題とするが、上述したように、国レベルでは市民農園に関しては法整備が進んできており、先進事例も蓄積されているにもかかわらず、市民農園の面積や設置数は全く不十分で、なかなか拡大せずに、普及が滞っていると考えられる。

小金井市にしても、20年以上前から市民農園の効用が論じられ、提案されており（小金井市農業委員会 1989）、かつ需要は増えるばかりで、利用希望者が多く、応募倍率は5倍を超えているにもかかわらず、市民農園の制度化（供給の拡大）は十分に進んでいない。これは農家、農協、市役所行政および市民の間に十分な意見交流がなく、都市計画に市民農園を確かに位置付けていないからに他ならない。

さらに、国や自治体における市民農園の役割の理解の中に、家族と地域レベルの食料安全保障、在来品種や郷土食のような生物文化多様性保全の行政策がまったく抜け落ちている。グローバルな商業主義、国家レベルの食料自給率

と輸出入産品や金融などの国際取引にばかり政策の焦点を当てているが、他方で、地域や家族レベルの細部にまで目配りして、為政者が行政策を実行することを望む。

世界でも日本でも、すべては各地域で、日常レベルの現場で起こることが発端となる。現場から発しない机上の美辞麗句、空論は一利なしとはしないが、百害はある。都市農地や農山村がその多面的機能を発揮するためには、多面的な視野での目配りが必要である。日常的な地産地消にしても、非日常的な災害時の避難場所にしても、食料の安全保障と生物文化多様性保全の重要さを認識して議論がなされているのではない。日常生活レベルでの地域市場を安定持続的に経営しておけば、災害などの非常時においても緊急食料の調達が可能にできる。東小金井駅前に、最近できた「黄金や」のような地場産農産物や商品を扱う店は、三陸海岸地域の道の駅の震災時の事例に見られたように、緊急時1週間にも有効に機能する（木俣 未発表）。農耕をとまなわなない食教育ではなく、地域産品・在来品種を用い、郷土料理を伝える食農教育こそ、地域固有の伝統的知識を伝える、良好な環境学習プログラムといえる。

小金井市では江戸野菜を復活するためにいろいろな活動が行われてきた。上述したように東京学芸大学環境教育研究センター彩色園でも貫井南公民館の江戸野菜栽培講座が続いている。市民農園も市内7か所にあり、いろいろな野菜が作られている。市民へのアンケート調査では、市民農園と江戸野菜の必要性について積極的な意見があった。

江戸野菜については3～5年ほど前に小金井市報で知った市民が多く、その生産と消費に関しては大方が継続することに賛意を示していた（表1、表2）。江戸野菜を選ぶ理由は、地元農家を応援でき、地域を活性化し、生産者の顔が見える、新鮮な旬のおいしい野菜が食べられることとして評価していた。しかし、食料自給率の向上や食材価格についての関心は低かった（表3）。

江戸野菜として紹介されている種・品種は上

述した。これらを仮に江戸野菜とするなら、小松菜、亀戸大根などはよく周知されてきているが、滝野川ごぼうや奥多摩わさびなどのようにまだ、ほとんど江戸野菜として認識されていない野菜もあった(表4)。さらには、「江戸東京野菜」という表現(キャッチフレーズ)から、東京産であれば江戸野菜であると認識している回答者もあった。いわゆる江戸野菜も京野菜のようにしかるべき定義と保存制度を設けるべきである。

他方で、市民農園では江戸野菜はほとんど栽培の試みがなされていなかった。狭い区画と限られた借用期間では、ホームセンターなどで購入した種子や苗で、日常的な料理に使用するダイコン、ホーレンソウなどの栽培が優先されているといえる。1区画当たりの栽培種類数は幅広く2~14(平均6.3)で、特定の野菜しか作らない人から多様な野菜種を造っている人までいることが明らかになった。いわゆる慣行農法で肥料・農薬を多く施用する人もいたが、一方で、有機農法や炭素循環農法により有機肥料あるいはそれすら与えないで、無農薬栽培の人もいた。各農法の講習会などはまったく行われていないにもかかわらず、この市民農園の栽培技術は著しく高い。長年ホームガーデンをしてきた人や指導員(農家)が任意に技術を伝え、市民農園利用者間でも栽培法を互いに学び合うことがほどよく機能しているのである。

上述したように、江戸野菜の復活を地域振興の素材にし始めてから、次第に江戸野菜に対する認知が広がり、生産消費についても継続が望まれるようになってきた(表5)。回答者は地域の自然的環境は比較的良好とし、都市農業と地産地消への関心は高い。都市農地の保全に市民農園は役立っており、食料の安全保障にも有効であると考えている。市民農園の区画面積を倍加することを望みながら、使用料金に関してはおおよそ現状維持を望んでいた。

偏相関分析(表6)の結果によれば、江戸野菜の継続を望む回答者は、都市農業、地産地消、および市民農園増設を求めている。これらは相互に正の相関関係が強かったので、市民農園を

めぐって総合的な認識がなされていると考えられる。一方で、市民農園の面積と料金には関心が高く、地産地消には関心が低かったので、市民農園の面積・区画が確保され自給的農耕が可能になれば、その家庭の野菜購入が抑制される一面もあると考えられる。

しかし、市民農園の面積も区画も少ないので、地産地消に影響を及ぼすというよりも、むしろ都市農業への理解を増進すると考えることができる。実際に、地産地消に関心がある回答者は、江戸野菜の継続と都市農業への関心が高いが、市民農園については関心が低いことから、都市農業への関心と市民農園による野菜自給は結びつけて考えられていない。また、回答者は食料安全保障についても関心が弱い。多変量解析(表7)の結果も、主成分分析の第一主成分は地域での食料生産、第二主成分は都市農地の保全政策であり、これらのことを裏付けている。重回帰分析でも、モデル1(従属変数:都市農業への関心)は地産地消への関心、モデル2(従属変数:食料安全保障)は都市農地保全のみが有意であったことから、市民農園による自給農耕は一連の課題とは認識されていない。すなわち、市民が自ら街の農地(市民農園)を耕作して、家族の食料を自給することに関しては、いまだに重要性が理解されていないと考えられる。

自由記述のテキスト解析の結果から、都市農地保全に対する意見では(図2)、カテゴリ「農地・農家」を中心にして、1)「緑+<>、都市、保全」がつながり、他方で、2)「市民農園、市民」がつながっているのが、都市農地の保全については市民の関心と認識はあるといえる。市民農園を増やした方が良い理由はカテゴリ「野菜」と「自分」のつながりが強いので、野菜栽培の個人的意味が明確に意識されている。

市民農園に対する少数意見の中に、カテゴリ「楽しみ・希望・美味しさ・健康維持」、「多くの人・交流・コミュニケーション」、「地元・地域・宅地化」、「生産・生活・食料・防災」、および「倍率・一区画」があった。これらは市民農園の意義と今後の課題を示している。たとえば、住民の高齢化にともない市民農園の需要が高まって

いるにもかかわらず、宅地化によって農地がさらに失われ、市民農園の増設がいつそう困難になる、などの課題である。

市民農園やホームガーデンに関わってきた6名へのさらに詳しい質問紙による半構造化調査および3名に対する面接調査フリートーキングの結果からは、1) 市民農園(自給農耕)は楽しみ、生きがいである、しかし、2) 市民農園の制度内容が不十分で、需要にこたえていない、3) 行政、農家、市民との協働事業の体制作りがない、4) 江戸野菜などの在来品種は大切であるが、伝統を継承するには、地域の中に需要を作り出さねばならない、などの課題が明らかにされた。

これまでの検討から、いくつかの課題が明確になった。東京都小金井市における市民農園の制度が、国の法制度の改正によってさらに市民農園が有効に拡大できる状況となっているにもかかわらず、小金井市、農協および民間団体も市民の需要にできていない。市民の側も市民農園の多面的な意義と高い応募倍率を根拠に、小金井市などに、市民農園の増設を求めるべきである。また、江戸野菜の復活は小金井市から始めた事業であるので、本来の事業の趣旨である小金井市の農業振興を思い起こして、市内の食堂メニューの増加に加えて、市民も市民農園や学校園で数多くある江戸野菜を少しずつでも栽培して、在来品種の保存と郷土食の継承を行うことによって、地域社会での地産地消の需要を確立する必要がある。

謝辞

ホームガーデン研究会による調査にご協力くださった小金井市民の皆様に対して、お礼申し上げます。

文献

地域計画研究所, 2009, こがねい新鮮野菜庭先直売所マップ&レシピ集, 小金井市市民部経済課・小金井市農業委員会, 77+36pp.
Cotton, C.M., 2002, "Ethnobotany — Principles and Applications," John Wiley & Sons, Ltd., UK, 426pp. 木俣美樹男・石川裕子訳, 2004, 民族植物学—原理と応用, 八坂書房, 東京, 416pp.

Eyzaguirre, Pablo. B. and Olga F. Linares, 2004, "Home Gardens and Agrobiodiversity," Smithsonian Books, Washington, USA, 296pp.

Hopkins, Rob, 2008, Rob Hopkins, 2008, "The Transition Handbook from oil dependency to local resilience," Chelsea Green Publishing, White River Junction, Vermont, UK, 240pp.

木俣美樹男, 2011, 生物多様性条約締約国会議 COP10 の辺境にて, 民族植物学ノオト 4: 33-44.

木俣美樹男, 2012, 有機農業による野菜の生物文化多様性保全, 環境教育学研究 21: 3-19.

木俣美樹男, 2012, 持続可能な社会づくりを目指す「地域に根ざした環境教育」モデル構築事業資料集 24-27, ECOPLUS, 東京.

小金井市農業委員会, 1989, ふるさと・小金井・農業—みどり豊かな未来へ, 本編 181pp., 付録記録写真集 55pp.

公民館貫井南分館, 2005, 江戸野菜を作ろう! 実技講座(17年度公民館貫井南分館成人大学講座), 小金井市公民館.

農文協, 1989, 市民農園クラインガルテンの世界から—農のあるまちづくり, 22pp.

三鷹市・小金井市・東京都, 2006, 水湧くプロジェクト構想—三鷹市・小金井市地域資源活用プロジェクト(みず・みどり・江戸の記憶から始める地域深耕ルネッサンス), 東京都, 36pp.

中村敦夫, 2004, さらば欲望の国, 近代文芸社, 東京, 197pp.

西川芳昭, 2012, 生物多様性を育む食と農—住民主体の種子管理を支える知恵と仕組み—, コモンズ, 東京, 235pp.

農林水産省関東農政局, 2006, 平成17年度関東食料・農業・農村情勢報告, 330pp.

野坂昭如, 2000, かくて日本人は餓死する, PHP 研究所, 東京, 195pp.

大竹道茂, 2009a, 江戸東京野菜—物語編, 農文協, 東京, 207pp.

大竹道茂, 2009b, 江戸東京野菜—図鑑編, 農文協, 東京, 159pp.

桜井良治, 1994, 東京都の生産緑地の保全と計画的市街化形成, 法経論集 72:13-44.

高橋栄一, 2008, 東京人—特集東京発とれたての野菜, 23(10), 都市出版株式会社.

タキイ種苗(株)出版部, 2002, 都道府県別地方野菜大全, 農文協, 東京, 359pp.

豊田菜穂子, 2005, ロシアに学ぶ週末術—ダーチャのある暮らし, WAVE 出版, 東京, 183pp.

宇沢弘文, 2000, 社会的共通資本, 岩波書店, 東京, 239pp.

宇沢弘文・内橋克人, 2009, 始まっている未来—新しい経済学は可能か, 岩波書店, 東京, 182pp.

山下惣一, 2004, 農から見た日本—ある農民作家の遺書, 清流出版, 東京, 262pp.

無芸大食への奈落 (続き) ～アマチュア国日本の黄昏～

木俣 美樹男 (黍稷農季人)

Infernal regions as “no accomplishment but eating” (continuation of preface)
～ A twilight of Japan as an amateur state ～

Mikio KIMATA

巻頭言が長くては具合がよくないので、ここに続きを書く。いずれこのことは詳細に検証し、上梓したいと思っている。

『帰去来の辞』で陶淵明は言っている。もちろん、主語は陶淵明であるが、現代の私や私たちに置き換えることもできる。さらに敷衍すると、すべての人類のことでもあるように思える。現代文明を自然に添わせるように、継承する文明のトランジションをゆっくりと始めた方が良いと思う。

以下に、帰去来の辞の現代語訳の一部を記す。
「さあ故郷へ帰ろう。

故郷の田園は今や荒れ果てようとしている。

どうして帰らずにいられよう。

今までは生活のために心を押し殺してきたが、もうくよくよしていられない。

今までの間違いだったのだ。これから正しい道に戻ればいい。

…… (中略) ……

さあ故郷へ帰ろう。

俗世間と交わるのは、もうようそう。

世間と私は最初から相容れないものだったのだ。

いまさらまた任官して、どうしようというのか。

…… (中略) ……

農夫がやってきて私に告げる。そろそろ春ですね、西の畑では仕事が始まりますと。

…… (中略) ……

万物が時を得て栄えるなか、

私は自分の生命が少しずつ、

終わりに近づいているのを感じるのだ。

…… (中略) ……

まあ仕方の無いことだ。

人間は永久には生きられない。

命には限りがある。

どうして心を成行きに任せないのか。

…… (中略) ……

富や名誉は私の願いではない。

かといって仙人の世界、などというものもアテにならない。

天気の良い日は一人ぶらぶらし、

傍らに杖を立てておいて、畑いじりをする。

…… (中略) ……

自然の変化に身をゆだね、

死をも、こころよく受け入れる。

こんなふうに天命を受け入れてしまえば、

もはや何のためらいも無いだろう。」

(<http://kanshi.roudokus.com/kikyorai.html>)

アマチュアの国日本の黄昏が、今、なぜ不可避なのか？ もちろん、気づき、努力すれば、今からでも没落は避けることはできる。しかし、誰かが気づいていても、多くの人々は三猿のように、見ないふりをして、聞かないし、ましてや言わないので、やはり残念ながら、このままでは日出る国の日没は近いのであろう。

さて、議論を深めるために、まずはアマチュアとは何かから問わねばなるまい。近代オリンピックの創立者クーベルタンはアマチュア主義を尊び、「オリンピックの出場者は、スポーツによる金銭的な報酬を受けるべきではない」と考えた。換言すれば、プロフェッショナルとアマチュアの区別は次のようなことではないのだ

ろうか。

会社で経理事務をしている人が、趣味でチョウチョの研究を自費でしているなら、彼は経理のプロフェッショナルであり、チョウチョ研究のアマチュアである。趣味が高じて、博士号まで取得し、会社を退職して博物館の学芸員になれば、研究で給料も研究費も受け取るので、プロフェッショナルになったことになる。このように、アマチュアがプロフェッショナルを凌駕することは素晴らしいし、さらに、この延長でプロフェッショナルになるのは願わしいことでもある。

しかし、アマチュアが専門的な研鑽を積まないで、いつまでも専門的職業に留まることには問題がある。どうして、引退したスポーツ選手やタレントが、専門的な政治的スキルを要する国会議員に当選するのだろうか。テレビに出て有名になり、知名度で多くの票を獲得できるからである。知名度で個人得票も比例区得票も有利に獲得でき、テレビ番組が国会議員をつくるということになる。彼らには国民の代表として立法院（国会）における政策立案能力を期待されているのではない。政策立案は官僚任せで、立法院の役割である議員立法はまれにしかないからである。

日本の民主主義ではいまだに三権分立は実をとまっていらないようだ。三権力に関わる方々は十二分に義務を果たさず、責任を取らずに、自己保身を保守主義と称して偽装しているので、火山噴火、地震・津波などの自然災害、水俣病などの公害、原子力発電所の崩壊のような人為災害に対しても、この国では地位ある誰もが自己保身ゆえに、現場でも、事後においても危機管理ができず、責任をとらないという構造になっている。

率直に言えば、権力ある地位にいる方々は義務として社会的責任をとらねばならないし、他方、庶民といえども家族や地域社会に対しては市民としての責任を果たさねばならない。この国では明治維新以来、次第に、常民は生業をなくして食料安全保障に対する思考を停止し、無芸大食、悪しきアマチュア政治家により拝金主

義の極致へと導かれ、中央国家が地方故郷（くに）を衰退に追い込んできた。本来なら、フランス革命の「自由、平等、博愛（友愛）」の精神によって、市民社会の成立へと進んだはずである。

国家 vs くに、為政者 vs 庶民の対立の中で、いつの時代でも、優れた庶民はいるが、混乱の中で斃れ、正史には載らない。正史などに載せる必要はないが、庶民・常民・市民で、社会正義を貫いて、人類の文化的進化を進めた人々を忘れずに、彼らと自らの歴史、および故郷（くに）の歴史を語り継がねばならない。

日本の場合、保守主義といっても実際は権力者の自己保身である。自己保身と保守主義は異なる。保守底流の立場からすれば、市民社会の個人主義、民主主義、自由主義はフランス革命などによって獲得された社会制度を保障する考え方として、持続せねばならない。オーウェルの描いて見せた「1984年」の全体主義の世界は願い下げだ。現実のこの年には、著者らは第1回野外教育セミナーを開始していた（p27 参照）。環境教育という手法で、インドのマハトマ・ガンディーに学んで、非暴力・不服従主義の世直しを求めようとしたのである。

水戸学（水戸光圀）、国学（平田篤胤）の系譜が、廃仏毀釈から国家神道へと導き、水戸藩と薩摩藩は尊王攘夷へと進み、桜田門外の変から戊辰戦争をへて、薩摩藩・長州藩閥と岩倉卿ら公家は明治維新政府を確立していったと、気づかされる。明治維新の歴史的功罪を再検証するところから、日本の、この国家と故郷の未来が再創造される契機が生まれると考えるようになった。

「いも侍」が「こめ華族」になったという思い付きを確かめるために、薩摩藩（鹿児島県）に行った。神風特攻隊の出撃基地であった知覧の武家屋敷を見に行き、また、この地の地域出版物を読んで、なぜ、雑穀畑作文化が水田稲作文化に消されてきたのかという、長年の疑問が解けてきた。

日本民俗学の祖といわれる柳田国男も最初は

日本の山民に強い関心を持って、『遠野物語』や『山の人生』などを書いていたが、官僚であったためか、山村の畑から農村の田んぼに研究の中心を移して、国家主義の政策に沿うようになったようだ。八百万のカミガミはじめ、山の神や誰もが、いもや雑穀を食べた縄文文化を軽視し、栽培しても、自ら食べられずに、有力者に取り上げられたイネ（米）の弥生文化の系譜を偏って重視するように、柳田は関心を変化させていった。

今日でも、天皇家は日本の伝統を後世に継承して、アワとイネとを新嘗祭に供儀されているというのに、明治維新によってこの国は畑作の縄文文化の系譜を損ねてきた。天皇家は縄文のアワ、弥生のイネを共に新嘗祭に供しており、伝統をつないでいる一族である。論理的には、天皇制は「自由・平等・博愛」の精神に添わず、民主主義には合致しない。しかし、天皇家が象徴としてこのくにの伝統を継承されておられることには、熱い共感を覚え、プロフェッショナルに対する尊敬の念を禁じ得ない。

何故ならば、この国は「無食政治家」によって、金融経済のグローバリズムに導かれて、終に TPP（環太平洋経済連携協定）に参加し、食料生産・農業を諦めて、稲作さえも捨て去ろうとしている。これには将来を見ない、自己保身的な政治家や官僚だけではなく、深く勘ぐってみれば、無知は無恥であり、農業をすてた金融機関農協も、農産物は安ければよいという都市の消費者も共謀しているようだ。

この流れは雑穀・いも畑作を否定的にとらえた明治維新の政策の系譜から第2次世界大戦時の配給制度などの政策に発している。国家主義は幾多の戦争へと向かい、終には太平洋戦争に至り、日本の「大和魂」には「神風」も吹かずに、歴史上初めて外国に膨大な物量と人員を第2次世界大戦に投入したアメリカ軍に、本土進攻を許す大敗を喫した。このため、決定的に「稲作民族」としての誇りさえを失い、ごはん食（イネ）がパン食（コムギ）に置き換わり、米（イネ）の消費量が減り、減反政策がとられた。敗戦後に、「ムギ官僚」があらわれ、配給コムギはア

メリカの余剰生産物で、食糧を国際貿易の商品にする嚆矢になった。

帰去来の辞に強い共感をもつ。陶淵明を自らに重ねて、自分の信念を貫くことに誇りをもつ。あと一年で義務に縛られた職業人生活は終わる。人生の振り返りをする季節になったようだ。ところで、改めて考えている。大学とは何だったのか？

「この世で大学ほど美しいものはない。なぜならそこは無知を憎む人間が知識を得るために努力し、真実を見たものがそれを広めようと努力する場所だからだ。」(J. メイスフィールド)

参考文献

- 青屋昌興、2012、薩摩史談 ―西郷隆盛と明治維新、南方新社、鹿児島市。
朝日新聞鹿児島総局編、2008、薩摩の殿、南方新社、鹿児島市。
芳即正、2009、権力に抗った薩摩人 ―薩摩藩政時代の真宗弾圧とかくれ念佛、南方新社、鹿児島市。
名越護、2011、鹿児島藩の廃仏毀釈、南方新社、鹿児島市。
下野敏見、2012、鹿児島ふるさとの昔話2、南方新社、鹿児島市。

資料：環境教育セミナーなどの概略史

木俣 美樹男

Archives of Environmental Education Seminar since 1984

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

環境教育セミナーは不定期に開催する公開の学習会として1984年11月から始め、当初は野外教育セミナーと称し、東京学芸大学附属農場と自然文化誌研究会冒険探検部との共催で第6回まで実施していた。その後、附属農場は文部省令による附属野外教育実習施設になったが、そのまま、自然文化誌研究会冒険探検部との共催でセミナーは継続してきた。

途中（1986～1989年）には、野外教育シンポジウムを開催し、日本環境教育学会の創立準備を進めたために、セミナーは中断した。同学会の創立後、第7回（1990年7月）からは環境教育セミナーと改称して再開し、2013年4月現在、第33回環境教育セミナーの準備を進めているところである。

附属野外教育実習施設は環境教育実践施設に改組、現在は環境教育研究センターに改称している。自然文化誌研究会冒険探検部も変遷はあったが、現在は特定非営利活動法人自然文化誌研究会（東京都認証）と称しており、環境教育セミナーは今日まで共催してきている。

第1回 野外教育セミナー

1984年11月 都市における農業教育

明峰哲夫（やば耕作団）

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第2回 野外教育セミナー

1985年2月 ものづくり学習

小島靖子（八王子養護学校）

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第3回 野外教育セミナー

1985年5月 農業教育の必要性

（アジア学院）

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第4回 野外教育セミナー

1986年 野外教育について

石岡信（日本野外教育研究会）

共催：東京学芸大学附属農場、自然文化誌研究会冒険探検部

第1回 野外教育シンポジウム

期日：1986年6月28日～29日

場所：東京学芸大学

主催：野外教育シンポジウム準備会

協賛：（社）青少年交友協会・野外文化研究所、（財）農村開発企画委員会、日本野外教育研究会、環境教育研究会、東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部

プログラム：

・準備会挨拶

◎6月28日「学校教育・社会教育における野外教育活動」

1) 学校周辺のネイチュア・トレイルの活用：中込卓男（五日市町立戸倉小学校）、座長＝河口徳明（千葉大学大学院理科教育専攻）

2) 社会教育における子供の自然接触のありかた：柴田敏隆（日本野外教育研究会）、座長＝山田卓三（兵庫教育大学生物教室）

3) 総合討論 座長、榊原雄太郎（東京学芸大学理科教育教室）

◎6月29日「海外における子供の野外文化活動」

- 4) インドネシアにおける子供の野遊び：ジュハナ・スプリアジ・マリアジナタ（一橋大学大学院地理学専攻）、座長＝深野和彦（青少年交友協会）
- 5) 野外文化の子供への伝承のありかた：森田勇造（青少年交友協会）、座長＝石川英夫（財・農村開発企画委員会）
- ・ 野外教育施設の見学
- 6) 総合討論：座長＝北野日出男（東京学芸大学生物教室）

第2回 野外教育シンポジウム

期日：1987年6月14日

場所：大阪教育大学

主催：野外教育シンポジウム準備会

協賛：（社）青少年交友協会・野外文化研究所、（財）農村開発企画委員会、（財）森とむらの会、環境教育研究会、日本ナチュラリスト協会、ナチュラリスト環境教育センター、東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部

プログラム：

・ 準備会挨拶

- 1) 学校の歴史的変遷と現状について～千葉県の小学校を中心として～：河口徳明（三重県南島町立島津小学校）
- 2) ちえおくれの子供たちの農場実習：綾部捷（大阪教育大学附属養護学校）
- 3) 新しい野外教育のめざすもの 社会教育における野外活動～大阪府の事例を中心に～：立沢史郎（大阪教育大学大学院理科教育専攻）
- 4) 野外教育シンポジウムの発足の経緯：木俣美樹男（東京学芸大学）
- 5) 自然は自然から学ぶ：水野寿彦（大阪青山女子短期大学）
- ・ 総合討論
- ・ 野外教育シンポジウムの発足の経緯（図1）

第3回 野外教育シンポジウム

期日：1988年6月5日

場所：愛知教育大学第2共通棟 422室

主催：野外教育シンポジウム準備会

プログラム：

野外教育シンポジウム発足の経緯

木俣美樹男（東京学芸大学）

1. 野外教育とは何か？

◇ 野外教育研究会の概念

- 1) 体育に関連をもつ野外活動の領域
- 2) 自然および自然と結びついた文化から学ぶ領域
- 3) 農山漁村において自然に働きかける領域

◇ 森田（1979）の概念

- 1) 自然と生活（自然観察、農林水産業体験、野外生活）
- 2) 野外運動（長距離歩行、野外遊び）
- 3) 歴史と伝統（祭りや年中行事、地域調査）

◇ 斎藤（1972）の概念

- 1) 安全教育
- 2) 道徳教育
- 3) 作業教育
- 4) 自然学習
- 5) 芸術教育
- 6) 体育・スポーツ

◇ Y M C A のポイント ボニタ 野外センターの概念

- 1) 自然誌学習活動（地誌、生態学、野性生物）
- 2) 文化誌学習活動（インディアン、探検家、移民）
- 3) 野外活動
- 4) 芸術活動

2. 東京学芸大学野外教育実習施設の概要

◇ 設置の柱

- 1) 自然と人間との歴史的関係の野外教育法に関する分野
- 2) 野外教育を実践する施設・設備およびその利用法に関する分野
- 3) 野外教育教材の開発・系統保存・供給に関する分野

◇ 研究業務

- 1) 野外教育研究部門
- 2) 野外教育教材研究部門
- 3) 野外教育施設研究部門
- 4) 自然誌研究部門
- 5) 自然表現研究部門

◇ 教育普及業務

- 1) 学部学生向け実習・講義
- 2) 附属学校園向け体験学習
- 3) 現職教育および生涯学習
- 4) 課外教育

3. 野外教育をめぐる状況

◇ 環境教育研究会

- ◇ 育てる会、青少年交友協会、自然保護協会、ナチュラリスト協会
- ◇ 森とむらの会、農村開発企画委員会、農村生活総合研究センター
- ◇ 臨時教育審議会（自然体験学習、山村留学、生活科）

4. 野外教育シンポジウム発足の経緯

◇ 契機

◇ 目的 自由な討論、ネットワーク作り

図1 （出典：第2回野外教育シンポジウム講演要旨集）

・ 準備会挨拶

- 1) 自然の特質にあった自然教育：渡辺隆一（信州大学志賀自然教育研究施設）
- 2) 愛知県における自然観察会の事例：中西正（愛知県立成章高校）
- 3) 現代の若者たちの生活体験～生活体験に関するアンケート調査から～：北川尚史（奈良教育大学生物学教室）
- 4) 見て見ないふりの自然学習のすすめ：山田卓三（兵庫教育大学生物学教室）
- 5) 養護学校における農耕文化の基本複合の学習：宮本透（東京学芸大学附属養護学校）

- 6) 生物教育と農業 そして野外教育：岩田好宏（千葉県習志野市立習志野高等学校）
 - 7) 人々の暮らしと自然～都市の自然を探る、高校理科教育の実践より～：山岡寛人（東京大学附属中・高校）
 - 8) 体育の立場からの野外教育：東原昌郎（東京学芸大学体育教室）
 - 9) 授業における野外観察：庄司裕志（名古屋市立御園小学校）
 - ・閉会挨拶
- 文献：第三回野外教育シンポジウム報告（1988.6.5）

第5回 野外教育セミナー

期日：1988年12月3日
 場所：東京学芸大学第四部会議室
 からだ・ことば・イメージの授業：鳥山敏子（中野区立桃園第二小学校）
 山村留学と子どもの成長：青木孝安（財団法人育てる会）

第6回 野外教育セミナー

期日：1989年5月20日
 場所：東京学芸大学第四部会議室
 後援：日本環境教育学会準備会
 東南アジアの環境問題と日本との関わり：村井吉敬（上智大学外国語学部）
 環境教育の国際的動向：橋本詔子（環境庁環境教育専門官）

第4回 野外教育シンポジウム

期日：1989年6月10日～11日
 場所：長野県山ノ内町志賀高原
 主催：野外教育シンポジウム準備会
 後援：信州理科教育研究会、信濃教育会
 プログラム：
 ・準備会挨拶
 ◎6月10日 自然案内
 1) 野外教育、長野県の現状と問題：倉田稔（信州大学附属松本中学校）
 ◎6月11日
 1) 新しい保育を求めて：草刈広一（山形県、

共に育つ会）

- 2) 自然保護教育における原体験の位置：湊秋作（和歌山県熊野川小学校）
 - 3) 中学校での野外教育活動の試み：滝崎吉伸（愛知県東陽中学）
 - 4) 地域自然史教育としての野外教育を考える：岩田好宏（千葉県習志野高校）
 - 5) 環境教育としての冒険学校：瀬谷勝頼（東京学芸大学自然文化誌研究会・冒険探検部）
 - 6) 奈良公園の芝生の植生：北川尚史（奈良教育大学）
 - 7) アメリカの大学における野外教育：川村協平（山梨大学）
 - 8) 自然環境教育の構想：細山田三郎（鹿児島大学）
 - 9) 環境教育学会の創立に向けて：木俣美樹男（東京学芸大学）
 - 10) 総合討論
- 文献：第4回野外教育シンポジウム（1989）

第5回 野外教育シンポジウム

期日：1990年5月18日
 場所：東京学芸大学芸術館
 主催：日本環境教育学会準備会
 テーマ：野外で行う環境教育
 プログラム：
 ・準備会挨拶
 1) 花山キャンプでの試み：飯田稔（筑波大学）
 2) キープ協会におけるエコロジーキャンプ：川嶋直（キープ協会）
 3) 戸倉小学校における愛鳥活動：中込卓男（東京都五日市町立戸倉小学校）
 4) 野外教育センターにおける自由キャンプ：羽場睦美（野外教育センター）
 司会＝進士五十八（東京農業大学）、渡辺隆一（信州大学）

【関連集会】日本環境教育学会創立大会：環境教育の創造と実践

期日：1990年5月19日～20日
 場所：東京学芸大学芸術館
 主催：日本環境教育学会準備会

プログラム：(図2)

・準備会挨拶

◎5月19日 シンポジウム「今、求められている環境教育とは」

1) 都市の市民からの視点：川口啓明(科学ジャーナリスト)

2) 冒険から生まれる体験教育：木谷尚文(日本アウトワードバウンド協会)

3) 大自然の中で地球の詩を歌おう～北の大地で通年の月例自然教室を実践して～：三浦国彦(北海道旭川春光台中学校)

4) 社会科における環境教育：山下宏文(東京都品川区立第二延山小学校)

司会＝本谷勲(東京農工大学)、福島達夫(日本福祉大学)

・懇親会

◎5月20日 一般講演

記念講演：野生動物と環境～21世紀を共に生きるために：中川志郎(都立上野動物園)

・総会

・展示

・事務局長報告

第7回環境教育セミナー

期日：1990年7月14日

体験学習における環境の意味：小川博久(東京学芸大学)

体験学習と生活科：中野重人(文部省教科調査官)

第8回環境教育セミナー

期日：1990年10月27日

子供の生育環境とからだの発達：小野三嗣(東京学芸大学)

第9回環境教育セミナー

期日：1990年11月24日

農山村は教育にとっていかなる意味を持つか：吉田良一(エコライフ研究所)

日本環境教育学会準備会実行委員会報告要旨

I. 準備会の発足

日本環境教育学会を創立しようとの気運がありながら、それを現実のものとする動きが長い間見あたらなかった。そこで、1988年初夏に関東周辺の環境教育に携わってきた若手・中堅層の人々によって学会創立の契機とするための準備会を始めることになった。当初の基本的な準備活動の精神は、①数多くの多彩な方々の参加を得て、広く意見を集約するために準備期間を長くすること、②創立される学会は組織としては中立の立場を維持し、自由・活発な議論の展開を保障すること、③国内外に大きなネットワークを形成すること、であった。この精神に従って、学会創立呼びかけ人・準備会および賛同団体を広く募ることになった。

II. 世話人会の活動

準備会世話人会は当初19名によって構成され、1988年9月24日から1989年4月8日までの間に7回開催した。第1回は世話人会申合せ事項、学会趣意書(第1版)の内容・準備会会費の金額・事務局の設置等について決めた。第2回は呼びかけ人・賛同団体の募集方法について検討した。第3回はニュースレター発行・実行委員会への改組を行い、会則・学会誌について検討を進めることを協議した。第4回は趣意書(第2版)、関西「連絡所」について検討した。第5回は関連団体・文部省・環境庁・マスコミ関係者との連絡のあり方、学会創立時期について検討した。第6回は呼びかけ人から広く委員を募り、実行委員会に改組し、会則検討委員会・学会誌検討委員会を設置することについて協議した。第7回はセミナー等、準備会としての企画について検討するとともに、世話人会を実行委員会に改組することを決定した。

III. 実行委員会の活動

実行委員会は1989年5月20日から1990年5月19日までの間に12回開催した。第1回は学会誌専門委員会の委員委嘱、実行委員会協力委員について検討した。第2回は実行委員(14名)の確認、全国各地の協力委員(16名)を委嘱すること、創立大会について協議した。第5回野外教育シンポジウムを同実行委員会よりの申し入れにより、創立大会の関連集会として行うことを了承した。第3回は創立大会の具体的なスケジュール等について検討した。第4回は創立大会記念講演・シンポジウムのテーマと演者について検討した。規約専門委員会・学会誌専門委員会の審議経過について報告を受けた。第5回は引続き創立大会の内容について検討した。第6回は記念講演の演者を決定、拡大実行委員会開催・創立大会実行委員会設置について協議した。第7回は創立大会実行委員会設置、シンポジウムの演者の決定、総会の内容・初代会長の選出方法等について検討した。拡大実行委員会では創立大会委員長の決定、関連集会・関東支部について協議した。第8回は創立大会のテーマ・準備について協議し、規約専門委員会の中間報告について検討した。第9回は学会規約(案)、役員選挙規定および創立時役員選挙規定(案)について了承した。これに基づき、選挙管理委員会設置を決め委員委嘱を行った。第10回は準備会会計監査の委嘱を決定、創立時役員選挙の実施方法および学会誌専門委員会の中間報告について検討した。第11回は創立時役員選挙の結果に基づき次期事務局体制への引継、総会次第と実行委員会報告要旨(案)について検討した。第12回は総会運営について最終打ち合わせを行った。この間、実行委員会の協議内容については「準備会だより」によって準備会員・呼びかけ人に報告した。

IV. 広報活動

1988年9月から本日まで1年半有余の日本環境教育学会設立準備作業において、設立趣意書は第3版まで総計6000部、準備会だより第7号まで総計12500部、呼びかけ人名簿第4刷まで総計6000部、創立大会案内2000部を印刷し、環境教育関連団体および個人に広く配布し、学会創立準備への参加・協力を呼びかけた。他方、四大新聞・NHKほか多数の新聞・雑誌等には学会創立案内を掲載し、情報の流通に協力していただいた。

実行委員会実行委員

阿部治(埼玉大学教育学部教育実践研究指導センター)、小川潔(東京学芸大学農学教室)、木俣美樹男(東京学芸大学野外教育実習施設)、杉浦嘉雄(せたがやトラスト協会)、瀬谷勝頼(東京学芸大学探検部)、田沢興光(せたがやトラスト協会)、東原昌郎(東京学芸大学保健体育学科)、中込卓男(東京都五日市町立戸倉小学校)、樋口利彦(東京学芸大学野外教育実習施設)、松本敏(明治学院大学文学部教職課程)、八田洋章(国立科学博物館筑波実験植物園)、山下宏文(東京都品川区立第二延山小学校)、宮本透(東京学芸大学附属養護学校)、渡辺隆一(信州大学教育学部志賀自然教育園)。

実行委員会協力委員

赤尾整志(大阪府立園芸高等学校)、植原彰(やまなしナチュラリストの会)、川口啓明(科学ジャーナリスト)、川嶋直(財団法人キープ協会)、狩山廣子(神奈川県公害センター)、菊屋奈良義(日本自然保護協会)、小澤紀美子(東京学芸大学家庭科)、新城和治(琉球大学)、谷口弘一(北海道教育大学教育実践研究指導センター)、橋本詔子(環境庁企画調整課)、福島達夫(日本福祉大学)、細山田三郎(鹿児島大学教育学部寺山自然教育研究施設)、山本友和(上越教育大学社会系)、鈴木善次(大阪教育大学理科教育)、三浦国彦(旭川市春光台中学校)、浜口哲一(平塚市博物館)。

規約専門委員会(委嘱委員)

牛山積(早稲田大学法学部)、河村重行(田園調布双葉小学校)、花岡かをり(文京大学)、山岡寛人(東京大学附属高等学校)

学会誌専門委員会(委嘱委員)

柴田敏隆(ナチュラリスト)、進士五十八(東京農業大学)、本谷勲(東京農工大学)、山田卓三(兵庫教育大学自然系)、提達俊(横浜市市ヶ尾小学校)

第10回 環境教育セミナー

期日：1991年8月

テーマ：環境教育事業としての農山村エコミュージアム

主催：自然文化誌研究会（INCH）、東京学芸大学野外教育実習施設（FSI）

後援：埼玉県大滝村、林野庁秩父営林署、（財）森とむらの会、（社）全国林業改良普及協会、（財）21世紀村づくり塾、（財）農村開発企画委員会、（社）国土緑化推進機構の助成による。

プログラム：

- ・はじめに 木俣美樹男（東京学芸大学野外教育実習施設）
- ・秩父地方の森林・林業について～奥秩父の国有林を中心に～：安部廣吉（秩父営林署長）
- ・教育的な活動の場としての農山村の役割と活用：筒井迪夫（東京大学教授）
- ・エコミュージアムと農山村の振興、西沢信雄（朝日町エコミュージアム）
- ・環境教育の現状と可能性：川嶋直（財・キープ協会）
- ・大滝村中津川周辺でのエコミュージアム：岡本達治（自然文化誌研究会）
- ・大滝村の観光文化資源の保全と開発：木村清（大滝村役場）

◎第1回野人養成講座：

- ・野人養成講座について～野人人生の楽しみ方：中込卓男（自然文化誌研究会）
- ・森林と人との新たな関わりについて～雑木林の過去と現在：中川重年（神奈川県林業試験場）
- ・埼玉の自然誌～山地帯の森林と林床の植物：大田和夫（埼玉県立自然史博物館）

文献：第10回環境教育セミナー～環境教育事業としての農山村エコミュージアム 資料集

第11回 環境教育セミナー

1993年 国際理解と環境教育

◎第2回野人養成講座

1993年 アイヌ文化にふれる：貝沢薫

◎第3回野人養成講座

1993年 太鼓と縄文土器：金子愛愛、星喜徳

第12回 環境教育セミナー

テーマ：市民が耕す農研究会『環境教育と農業』

期日：1994年1月23日

場所：東京学芸大学20周年記念館2F

内容：12:00～13:00 野外教育実習施設見学
13:00～16:00 研究会

参加者数：約20名

◎第4回野人養成講座

1994年 野焼きと栃餅づくり：金子愛愛

第13回 環境教育セミナー

期日：1994年4月29日～5月1日

場所：埼玉県秩父郡大滝村中津川 中津川キャンプ場内講堂

テーマ：農山村エコミュージアムづくりによる都市と農山村との交流

趣旨：日本のエコミュージアムやグランドワークの現状とともに、大滝村エコミュージアムの実践事例を報告する。農山村を環境教育のフィールドとして活用しつつ、環境保全や地域振興と両立させる有効な手段として注目されているエコミュージアムについて議論を深める。

後援：林野庁・秩父営林署、埼玉県大滝村

参加人数：約40名

プログラム：

◎4月29日

- ・基調講演「エコミュージアムの誕生」新井重三（丹青総合研究所）
- ・日本のエコミュージアムの事例と特色：加藤由美子（丹青総合研究所）
- ・大滝村の自然と文化：中込貴芳（自然文化誌研究会）

◎4月30日

- ・基調講演「エコミュージアムとしての林業の活用」鶴見武道（千葉県立茂原農業高等学校）
- ・日本におけるグランドワークの動向：吉田一良（エコライフ研究所）
- ・雑穀で村おこし：斎藤吉五郎（群馬県甘楽町雑穀をつくる会）
- ・報告会「大滝村エコミュージアム」岩谷美苗（自然文化誌研究会）

中津川地区親交会の復活：山中新一（中津川親
交会）

・懇親会

◎5月1日

・全体討議「これからの日本のエコミュージア
ムを考える」秩父エコミュージアム研究委員
会

第14回 環境教育セミナー

期日：1995年6月9日～11日

場所：大滝村中津川、大滝グリーンスクール

テーマ：環境教育の場としてエコミュージアム
を考える

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)
森とむらの会、自然文化誌研究会、環境文明
研究所

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩
父営林署

プログラム：

◎6月9日：オブションプログラム

・環境教育アクティビティ体験：森良（ECOM
代表）

・中津の自然と文化にふれる会：岩谷美苗（自
然文化誌研究会研究員）

・山村夜話：山中秀人（民宿ひげ主人）

◎6月10日

・エコミュージアムによる地域の環境文化の創
造実践エコミュージアムのすすめ：新井重三
（丹青研究所顧問）

・大滝村エコミュージアムの環境教育実践：小
川博久（東京学芸大学環境教育実践施設長）

・パネルディスカッション：

コーディネーター＝加藤三郎（環境文明研究
所長）／パネラー＝西沢信雄（山形県あさひ
町ナチュラリストの家）、笹谷康之（立命館
大学）、市川平治（群馬県倉渕村議会）、永岡
賢治（広島県高宮町役場）、山中進（大滝村
中津屋主人）

・記念講演：「森林と農山村の未来を語る」高木
文雄（森とむらの会会長）

・基調講演「地域と学校を結ぶこれからの教育
システム」中野重人（文部省視学官）

◎6月11日

・子どもの知覚空間を広げる環境学習：寺本潔
（愛知教育大学助教授）

・生活体験を豊かにする環境学習・生活科：森
本直樹（大阪府八尾市立竹渕小学校教諭）

・教員養成における生活科カリキュラム：森茂
岳雄（東京学芸大学助教授）

・総合討論：地域と学校を結ぶエコミュージア
ムの展開に向けて

第15回 環境教育セミナー大滝

期日：1996年6月14日～16日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：みんなでつくろう新しい村のかたち

趣旨：日本の中でのエコミュージアム活動の
現状と課題の認識を深め、環境教育事業と地
域振興を融合した具体的な方策としてテレ
コミュニケーションを活用した農山村エコ
ミュージアムの普及・啓発を行う。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)
森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラ
ブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩
父営林署、日本エコミュージアム研究会、日
本環境教育学会

対象：一般（約50名）

プログラム：

◎6月14日

・大滝村エコミュージアムワークショップ：竹
かご作り＝岡野卯太郎（郷土史家）、大滝村
郷土料理の夕べ＝大滝村くらしの会、スライ
ド上映「大滝村エコミュージアムでの実践」
自然文化誌研究会

◎6月15日

「みんなでつくろう新しい村のかたち」

・みんなで守るこれからの森林：園田安男（森
づくりフォーラム）

・女性が支えるエコミュージアム：萩原なつこ
（東横学園女子短期大学）

・デモンストレーション：ミクロネシアと通信
してみよう1、エコクラブ。

・グローブ計画の試み：和田勝行（文部省中学

校課)

- ・テレコミュニケーションによる樹のプログラム：刈宿俊文（港区応神小学校）

◎6月16日

「開かれた村のエコミュージアムへ」

- ・デモンストレーション：ミクロネシアと通信してみよう2、エコクラブ。
- ・総合討論：エコミュージアムとテレコミュニケーション

Asian-Pacific Environmental Education Symposium ~ Environmental Education and International Cooperation in Asian-Pacific Countries ~

Date: November 12, 1995

Place: Azabu Green Kaikan Hall (Tokyo, Japan)

Organized by GLOBE Japan and The Japanese Society of Environmental Education

Co-sponsored by the National Land Forestation Promotion Organization, Forest and Village Association, The Institute of Natural and Cultural History, Asian Environmental Education Forum, Pan-Asian Consortium for Environmental Education, and World School Japan

Supported by Ministry of Education, Science, Sports and Culture, and Forest Agency

Program:

Opening remarks; Prof. Minoru Harada, Country Coordinator of GLOBE Japan

Dr. Makoto Numata, President of The Japanese Society of Environmental Education

1. Environmental education in Japan. Mr. Satoshi Ichikawa, Naruto Kyoiku University.
2. Environmental education in Thailand. Mr. Siriwat Soondrotok, Rajabhat Institute Phranakorn.
3. Environmental education in Philippines. Dr. Merile C. Tan, University of Philippines.
4. Environmental education and campaign in Korea. Prof. Lee See-Jae, The Catholic University of Korea.

5. Environmental education in China. Dr. Quan Hao, China-Japan Friendship Environmental Protection Center.

6. Environmental education and computer communication in the World School Project. Ms. Takako Takano, World School Japan.

Discussion: Coordinator; Prof. Kazuhiko Nakayama, Tsukuba University.

Concluding remarks: Prof. Mikio Kimata, Tokyo Gakugei University.

文献：環境教育研究第6号：59-103. 1996.7.

第16回環境教育セミナー大滝

期日：1997年6月14日～15日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：農山村の教育力を見直そう！

趣旨：農山村の自然と文化を生かした体験的な環境教育活動の実践事例を紹介し、農山村エコミュージアムを活用した環境教育の具体的な展開方法を、広く一般に普及する。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩父営林署、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

対象：一般（約60名）

プログラム：

◎6月14日

- ・さると人のくらし～猿害の現状と対策～：白井啓（野生動物保護管理事務所研究員）

選択実習：山村の自然を学ぼう！

- ・樹のお医者さんになってみよう：堀 大才（財・日本緑化センター主任研究員）

- ・昆虫植物観察会：北野日出男（創価大学教授）

◎6月15日

- ・バードウォッチング：中込卓男（小金井緑小学校教諭）

選択実習：山村の文化に学ぼう

- ・職人の技 竹かご作り：岡野卯太郎（郷土史家）
- ・郷土食づくり：千島敬子（大滝くらしの会）
- ・刃物と山村の生活：山中秀人（民宿ひげ）

- ・子どもたちに伝えよう！山村の知恵：山村のくらしと環境教育、小川博久（東京学芸大学教授）、ディスカッション

International Symposium on Common Agenda of Environmental Education in the Global Age

Date: February 21-22, 1998

Place: National Olympic Memorial Center for Youth

Symposium session:

Keynote address and Special lecture.

1. Up-to-date situation of environmental education.
2. Subjects of environmental education for future community.
3. Role of environmental education in educational innovation.
4. Environmental education in Global age.

Poster session:

Post International Symposium Program:

Organizing Committee:

Sponsors: Ministry of Education, Science, Sports and Culture, The Japan Foundation, The National-Land Afforestation Promotion Organization, and AEON Group Environmental Foundation.

Supporting Organization:

文献：International Symposium on Common Agenda of Environmental Education in the Global Age, ed. by Mikio KIMATA and Makiko KANODA, 1998.

第17回 環境教育セミナー大滝

期日：1998年6月13日～14日

場所：埼玉県大滝村グリーンスクール

テーマ：専門的な視点を学ぼう

趣旨：農山村エコミュージアム内に点在する自然や文化の環境教育教材を環境学的、専門的な視点から再検討し、そのプログラムを実践・展開することで、体験型環境教育の新たな手法として広く一般に普及啓発する。

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、(財)森とむらの会、自然文化誌研究会、エコクラブ、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、林野庁・秩父営林署、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

対象：教員、一般、学生、主婦、大滝村の方、関心のある方ならどなたでも（約100名）

プログラム：

◎6月13日 選択実習（弁当持参）

- ・大滝村の巨樹・古木を見に行こう～樹木匠さんの木の見方～：堀大才（財・日本緑化センター主任研究員）
- ・藍染実習～楽しい染色の文化～：鈴木美穂（手工芸家）
- ・竹籠作り～自分の竹籠を自分の手で～：岡野卯太郎（大滝村郷土史家、竹籠職人）
- ・スライド上映会「雑穀の起源を求めて」木俣美樹男（東京学芸大学環境教育実践施設）

◎6月14日

- ・バードウォッチング：中込卓男（小金井市緑小学校教諭）

選択実習

- ・大滝村の土を見る、土を知る～土が私たちに教えてくれること～：樋口利彦（東京学芸大学環境教育実践施設）
- ・自然観察のすすめ～森にひそむ生き物たちを通して：山田卓三（名古屋自由学院短期大学）
- ・自然の中での写真の撮り方：菊池知義（動物カメラマン）
- ・雑穀～日本の伝統食から世界をつなぐ～：木俣美樹男（東京学芸大学環境教育実践施設）

第18回 環境教育セミナー大滝

期日：1999年6月12日～13日

場所：埼玉県大滝村 大滝グリーンスクール

テーマ：エコミュージアムを活用した環境教育の実践

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、自然文化誌研究会、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、大滝村、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

協力：東京都環境学習リーダー

対象：教員、学生、主婦、大滝村民、関心のある方（64名）

プログラム：

◎6月12日

選択実習

- ・里山の昆虫観察
- ・環境美術の親しみ方～大滝村でアートする
- ・大滝村の郷土料理～村人との楽しい語らい
- ・竹籠作り
- ・スライド上映「奥秩父の動物たち」

◎6月13日

自由参加「大滝村の野鳥観察」

選択実習

- ・自然の中での写真の撮り方
- ・大滝村の土を知る
- ・自然のものをもっと食べよう
- ・土の中から木を観察する

全体会「これから私たちが大滝村でやりたいこと」

第19回 環境教育セミナー大滝

期日：2000年6月10日～11日

場所：埼玉県大滝村中津川地区および大滝グリーンスクール

テーマ：エコミュージアムを活用した環境教育の実践

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、自然文化誌研究会、大滝くらしの会

後援：埼玉県教育委員会、日本エコミュージアム研究会、日本環境教育学会

協力：彩の国ふれあいの森管理事務所、東京都環境学習リーダー

対象：小中高教員、教育・研究・行政機関関係者、学生、その他一般

プログラム：

◎6月10日

大滝村エコミュージアム観察会（選択実習）

- ・鉄砲堰見学とシオジの原生林コース
- ・大滝村の昔ながらの生活文化体験コース
- スライド上映会「ボルネオの昆虫」

◎6月11日

自由参加「早朝探鳥会」

選択実習

・山村の自然と文化を題材にした総合学習の実践

座談会「大滝村エコミュージアムの明日を考える」

第20回 環境教育セミナー

期日：2001年5月12日～13日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：どう発展させよう、これからの環境教育・学習センターの環

協力：タイ日本自然クラブ（TJ Club）、東京都環境学習センター、財団法人森とむらの会

参加者数：48名

プログラム：

◎5月12日

13:00～13:30 あいさつ 小泉武栄（環境教育実践施設）、上飯坂實（財団法人森とむらの会）

13:30～17:00 なぜなぜシンポジウム

コーディネーター 樋口利彦（環境教育実践施設）

・なぜ、昆虫が好きなのか？ 北野日出男（創価大学）

・なぜ、植物が好きなのか？ 阪本寧男（龍谷大学）

・なぜ、環境教育を始めたのか？ Laddawan Kanhasuwan（Rajabhat Phuranakon University）

17:00～18:00 夕食

18:00～20:30 車座シンポジウム

◎5月13日

9:00～12:00 いろいろワークショップ

・サイチョウと遊ぶ

・タイ料理作り

・ラジャバト・プラナコン大学との交流

・パン作り

12:00～13:30 昼食交流会

13:30～14:00 環境教育実践施設の案内

第21回 環境教育セミナー

期日：2003年5月17日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：焚火を囲みながらアイヌ文化を語ろう

共催：自然文化誌研究会

内容：北海道浦河町出身の浦川治造さん（東京アイヌ協会会長）の感受性豊かな子ども時代に大自然の中で遊び呆けた頃の語りとともに、トノキやキトロビなどアイヌの伝統料理を味わった。

第22回 環境教育セミナー

中止

第23回 環境教育セミナー

期日：2005年2月19日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：「太陽人」として生きる～ラコタ・ピースガーデン・プロジェクト～

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、ミレットコンプレックス

内容：拡大家族としての付き合いから学んだ、アメリカ先住民ラコタ・スー族の伝統的な智慧の世界。「すべては繋がっている」という「地球の守り手」としての彼らの世界観を、現代のホリスティックな科学・哲学によって新しく捉え直し、「平和の文化」を気づく道を探るため、具体的な事例として「ラコタ・ピースガーデン・プロジェクト」が紹介された。また、NASAのSun-Earth Dayの教育用映像ツールなどを用いて、共通分母としての「太陽」に光をあてた話がなされた。ラコタ族の伝統的な祈りの歌と演奏とともに参加者との交流が図られた。

第24回 環境教育セミナー

期日：7月23日

場所：東京学芸大学附属環境教育実践施設

対象：高校生以上

プログラム：

13:30～16:30 話題：1) 自然観察と水彩画の実技、
2) オーロラと火山の話：田中千尋（お茶の水女子大学附属小学校）

16:30～ 懇親ビアガーデン（カンパ制）

第25回 環境教育セミナー

期日：2006年6月18日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、東京学芸大学環境教育実践施設

プログラム：

13:00～15:00 話題：TJクラブ（タイ・日本自然クラブ）の活動を振り返り、タイの自然や環境文化を紹介する

・現地で収集した生活文化に関する資料や、共同開発した環境学習教材、環境教育資料などの展示も。

終了後 懇親会（国分寺のタイ料理レストラン）

第26回 環境教育セミナー

期日：2006年12月2日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設

テーマ：ELF環境学習プログラムとは～より活躍できる環境学習指導者をめざして～

趣旨：あなたは、環境学習指導者に関する何かの資格をお持ちですか？それを活かした活動をなされていますか？

環境学習プログラムに関する初級指導者は全国に30万人ほどいるとされています。その多くはペーパーライセンスとなっているのかもしれませんが。これは活躍の場が少ない、スキルアップのための研修機会が少ないなどによると思われます。専門的な環境学習指導者をめざす人を取りまく状況はあまりよくありません。

そこで、現在、自然文化誌研究会は東京学芸大学環境教育実践施設と共同で実施してきた公開講座などの経験に基づいて開発してきたELF環境学習プログラムをもとに、秩父多摩国立公園を中心に活躍する中堅指導者養成研修会を準備しています。今回は、ELF環境学習プログラムの基礎的な考え方とその実践例をご紹介します。また、参加者のみなさんといっしょに、環境学習、環境保全、環境創造を実践的に指導でき、また企画運営ができる専門職業人をめざして、なにが現在、必要かを考えたいと思います。環境学習指導に関わる多くの方々のご参加をお待ちします。

主催：NPO 法人自然文化誌研究会

後援・協力：東京学芸大学環境教育実践施設、山梨県小菅村、小菅村教育委員会、小菅村観光協会、小菅村商工会、(財)水と緑と大地の公社、小金持ち工房、100%自然塾、小金井市教育委員会、国分寺市教育委員会、東京学芸大学サークルちえのわ

定員：50名

プログラム：13:00～17:00

- ・講義「ELF環境学習プログラムとはなにか？」中込卓男（自然文化誌研究会）
- ・事例報告：「植物と人々の博物館」展示プロジェクト 井村礼恵（東京学芸大学）
- ・ワークショップ：より活躍できる環境学習指導者をめざして～ELF環境学習プログラムの活用

東京学芸大学 現代GP講習会／連続講演会 ～エコミュージアム日本村、「植物と人々の博物館」づくりをめざして～

1. 雑穀栽培講習会（第6回）

期日：2006年8月28日～29日

場所：小菅の湯体験農園内見本畑、中央公民館内植物と人々の博物館ほか（小菅村往復のバスは東京学芸大学発着）

対象：学生15名、市民15名、その他一般20名

内容：1) キビの収穫と防雀網掛け

2) キビのお菓子作り

3) 博物館の民具の整理、展示

2. 講演会

期日：2006年10月21日～22日

場所：小菅村中央公民館内植物と人々の博物館ほか（小菅村往復のバスは東京学芸大学発着）

対象：学生20名、市民20名、その他一般60名

内容：

◎10月21日

13:00～14:00 特別講義「アッサム農山村の生物文化多様性」S. パンダ（カルカッタ大学）

14:00～17:00 調査研究報告「多摩川上流・鶴川流域の生物文化多様性保全」

- 1) 雑穀類の遺伝侵食と多様性の現地保全：木俣美樹男（東京学芸大学）・石川裕子（京都大学）

- 2) 野生動植物の生物文化多様性の保全：井上典昭（大月短大附属高校）・井村礼恵（東京学芸大学）

- 3) 雑穀の地域社会史：増田昭子（立教大学）
研究報告：キリスト教の信仰と香草木：大澤由実（ケント大学）

◎10月22日

9:00～11:00 ワークショップ（事例報告）

- 5) エコミュージアム日本村構想：木俣美樹男（東京学芸大学）

- 6) 東京の森林林業と農山村：小机篤（東京都林家）

- 7) 小金井市における江戸野菜の復活：土井利彦（NPO法人ミュゼダグリ）

- 8) 小菅村における農山村エコセラピー：中田無双（エコセラピー研究会）

11:00～12:30 / 13:30～15:00

- 9) 分科会と全体会

主催：植物と人々の博物館

共催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、小菅村

協力：(財)水と緑と大地の公社小菅の湯、多摩川源流研究所、NPO法人自然文化誌研究会、NPO法人ミュゼダグリ、(財)森とむらの会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、ふるさと長寿館、土ようのたまり場、小金持ち工房、小菅村商工会、小菅村観光協会、北都留森林組合、北都留農業改良普及所

後援：日本有機農業研究会、雑穀研究会、とうきゅう環境浄化財団、(社)国土緑化推進機構、農林水産省ほか

文献：多摩川エコモーション報告書2006年度

第27回 環境教育セミナー／東京学芸大学現代GP講演会「植物と人々の博物館づくり さく葉標本庫一般公開とセミナー」

期日：2007年6月16日

場所：環境教育実践施設多目的室

講師：武井尚（さく葉標本庫の整備者、環境施設共同研究員）、山田卓三（植物と人々の博物館名誉館長）、山田益男（東京さく葉会）、岩槻邦男（東京大学名誉教授）

東京学芸大学 現代 GP : We Love Tamagawa い のちをつなぐ 138 ~ 第 1 回 多摩川エコミュ ジウム・ネットワーク・シンポジウム ~

期日：2007 年 11 月 16 日 ~ 17 日

場所：東京学芸大学講義棟 S410 他 4 階全フロ

ア、環境教育実践施設多目的室、彩色園など

趣旨：学生・市民が一緒になって多摩川をめぐるエコミュジウムに蓄積された知恵を共有し、流域住民に広く伝え、上・中・下流の人々の環境学習活動をつなぐ。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、植物と人々の博物館プロジェクト

協賛：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財)水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュジウム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、(特) 自然文化誌研究会、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所

後援：日本エコミュジウム研究会、東京都奥多摩町

プログラム：

◎ 11 月 16 日 18:00 ~

プレシンポジウム「野外環境学習活動について、じっくり語り合おう」高野孝子（エコプラス代表理事）

◎ 11 月 17 日 10:00 ~

開会の挨拶：実行委員長 古橋源六郎（財団法人森とむらの会会長）、東京学芸大学 地域と連携した環境学習推進委員会委員長 村松泰子（東京学芸大学副学長）、小菅村村長 廣瀬文夫（全国源流の郷振興協議会会長）

全体会：1) シンポジウムの趣旨説明

2) 多摩川をめぐるエコミュジウム活動の現場からの話題提供

展示：個人や団体の活動や研究をポスターなどで展示発表し、人々の出会いと活動経験を交

流する

分科会：多摩川の自然をめぐる展開されているいろいろな文化活動の経験を交流し、じっくり話し合う

1) 多摩川流域の生き物と川遊び；川や川原での遊び、河川敷の利用の仕方などについて、多摩川流域で生きる生物やこれをめぐる生物文化多様性の保全、外来生物の制御などについて

2) 山村の暮らしと産業振興；山村の生活をめぐる農林水業や観光業などの経済活動の実情をふまえて

3) 多摩川流域のまちづくり；環境保全、災害防止、景観を考えたまちづくりについて体験に基づいて考える

4) エコミュジウム・ネットワークづくり；多摩川流域住民や市民活動団体の連携、エコミュジウム活動の協働組織づくりについて
全体会：各分科会のまとめ報告を聞いて総合的な話し合いをする

交流会：遠くから参加の学生の皆さん向けに 2泊 3 日のテント村を設営（広域避難所体験を兼ねて）

文献：多摩川エコモーション報告書 2007 年度

第 28 回 環境教育セミナー／東京学芸大学 現代 GP 連続講演会「冒険探検における環境学習について、じっくり語り合おう」

期日：2008 年 11 月 4 日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設多目的教室

話題提供：関野吉晴（グレートジャーニー探検家、医師）、高野孝子（エコプラス代表、早稲田大学准教授）

趣旨：冒険探検活動の成功と安全確保は、いかにして環境を学ぶかにかかっているに違いない。脆弱になった現代日本人が人生を生きていくために大切な冒険探検の好奇心と環境への向学心をかきたてたい。二人の気鋭の探検家から、厳しい世界で自由に楽しく生きることの意味、知恵と技能の源泉を聞き出してみたい。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会、植物と人々の博物館プロジェクト
共催：東京学芸大学冒険探検部、(特) 自然文化誌研究会、大学探検部連盟

協賛団体：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財) 水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュージアム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所、日本たばこ産業(株)

文献：木俣美樹男・服部哲則・井村礼恵・南道子・中西史、2011、プロジェクト学習科目「植物と人々の博物館づくり」の方法論と評価、環境教育 43：2-15

環境教育学会小集会 2008

テーマ：環境学習原論、何が常に問われるのか？

目的・目標：

- 1) 人づくり：学習の目標、人を育む
- 2) 場づくり：学習の場、保全・創造活動の場
- 3) プログラムづくり：学習素材から目標達成の枠組み、教材、プログラム、カリキュラム
- 4) 保全・創造行動：学びの成果が行動につながり、環境が改善される

東京学芸大学 現代 GP：We Love Tamagawa いのちをつなぐ 138 ～第2回多摩川エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウム～

期日：2008 年 11 月 14 日～15 日

場所：東京学芸大学芸術館

趣旨：学生・市民が一緒になって多摩川をめぐるエコミュージアムに蓄積された知恵を共有し、流域住民に広く伝え、上・中・下流の人々の創造的な環境学習の活動をつなぐ。子どもを中心とした農林漁業体験活動、農産物生産

者と消費者との交流、地産地消および伝統的食文化の継承といった地域の食農教育を推進する。す。流域の人々とエコミュージアムをつなぐネットワーク活動をつくる。

主催：東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員会・植物と人々の博物館プロジェクト

協賛：山梨県小菅村、小菅村教育委員会、(財) 水と緑と大地の公社、多摩川源流研究所、小菅村観光協会、小菅村商工会、100%自然塾、小菅村エコセラピー研究会、小金もち工房、(特) カッセ KOGANEI 市民起業サポートセンター、(特) ミュゼダグリ、小金井市環境市民会議、とうきゅう環境浄化財団、(財) 森とむらの会、(財) 森林文化協会、(社) 国土緑化推進機構、(特) 全国水環境交流会、(特) 多摩川エコミュージアム、(特) 環境文明 21、(特) ECOPLUS、(特) 自然文化誌研究会、北都留森林組合、(特) 環境文化のための対話研究所、日本たばこ産業(株)

後援：農林水産省、環境省関東地方環境事務所、国土交通省京浜河川事務所、東京都、山梨県、昭島市、あきる野市、稲城市、青梅市、大田区、奥多摩町、川崎市、国立市、甲州市、小金井市、国分寺市、小平市、狛江市、世田谷区、立川市、丹波山村、多摩市、調布市、八王子市、羽村市、日野市、日の出町、桧原村、府中市、福生市、瑞穂町、三鷹市、武蔵野市、武蔵村山市、日本エコミュージアム研究会、日本有機農業研究会、(社) 農山漁村文化協会

プログラム：

◎ 11 月 14 日

17:40～ プレシンポジウム座談会～食農教育から環境を学ぶ、じっくり語り合おう～

・コーディネーター：酒井文子（食育・野菜料理コーディネーター）

・話題提供：久保田裕子（有機農業研究会理事、國學院大学教授）、福田恵一（三鷹市立第六中学校教諭）

◎ 11 月 15 日

9:00～9:15 開会の挨拶

・実行委員長 古橋源六郎（財・森とむらの会会長）

- ・東京学芸大学地域と連携した環境学習推進委員長 村松泰子（東京学芸大学副学長）
- ・山梨県小菅村長 降矢英昭（全国源流の郷振興協議会会長）

9:15 ~ 12:00 シンポジウム

1. シンポジウムの趣旨説明 木俣美樹男（東京学芸大学教授）
 2. エコミュージアムをめぐる NPO 活動の現場からの話題提供
 - ・コーディネーター：土井利彦（NPO ミュゼダグリ副理事長）・嵯峨創平（NPO 環境文化のための対話研究所代表理事）
 - 1) 「多摩川エコミュージアム：川崎市」鈴木眞智子（NPO 多摩川エコミュージアム事務局長）
 - 2) 「江戸野菜の復活：小金井市」納所二郎（NPO ミュゼダグリ理事長）
 - 3) 「エコミュージアム日本村：小菅村」小島力（小菅村エコセラピー研究会会長）
 - 4) 「秩父まるごと博物館：秩父市」中谷亨（NPO ちちぶまるごと博物館理事長）
3. 総合討論
- ・展示（期間中）：個人や団体の活動や研究をポスターなどで展示発表し、人々が出会い、活動経験を交流する
- 文献：木俣美樹男編、2009、植物と人々の博物館一般公開記念解説書 p48、植物と人々の博物館プロジェクト
- 文献：木俣美樹男、2009、持続可能な社会づくりのための環境学習活動報告書 2008 年度 pp.26-29、東京学芸大学

第 29 回 環境教育セミナー

期日：2009 年 3 月 27 日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設会議室

テーマ：今日のタイの環境教育

話題提供者：Dr. Chinatat Nagasinha（ラジャバト・プラナコン大学環境教育センター、バンコック）

趣旨：同大学の環境教育センターはタイで最初にでき、日本で最初にできた東京学芸大学環境教育実践施設とは 10 年以上の学術交流協定を結んでいる。毎年、教員・学生の往来が

あり、環境学習共同キャンプを国立公園でしてきたし、卒業研究や教材開発も連携して実施した実績がある。交換留学もでき、大学院環境教育コースの講義（客員教授）も引き受けてきた。

主催：環境教育実践施設、NPO 法人自然文化誌研究会

日本エコミュージアム研究会全国大会

期日：2009 年 11 月

場所：神奈川県小菅村

文献：木俣美樹男・井村礼恵・黒澤友彦、2010、第 15 回全国大会 小菅村～源流の村
小菅村＝日本村：生物文化多様性を紡ぐ～、エコミュージアム研究 15：4-11

第 30 回 環境教育セミナー

話題：生物文化多様性とアニミズム

期日：2010 年 6 月 5 日

場所：東京学芸大学環境教育実践施設多目的室

主催：東京学芸大学環境教育実践施設、NPO 自然文化誌研究会

後援：三菱 UFJ 環境財団、財団法人森とむらの会／植物と人々の博物館、小金井環境市民会議、CBD 市民ネット／人々とたねの未来作業部会

プログラム：

9:00 ~ 12:00 ポスター・セッション

13:00 ~ 17:00 シンポジウム・座談会

・コーディネーター 塚原東吾（神戸大学教授）・吉富友恭（東京学芸大学准教授）

13:00 ~ 13:15 挨拶：木俣美樹男（東京学芸大学教授）：東京学芸大学で 1984 年から、自然文化誌研究会冒険探検部（昔）が環境教育実践施設（今）と共催で始めたこの環境教育セミナーは、日本環境教育学会の源流です。このたびは、記念すべき第 30 回を迎えましたので、国連生物多様性年にちなんで、「生物文化多様性とアニミズム」を課題にとりあげました。人々は暮らしの中で多くの生物とともに生活文化の多様性を蓄積してきました。アニミズムもその一つと考えられ、この「自

然信仰」の有り様をとらえ直すことは、生物多様性保全と環境学習の本質につながると思われます。自然の現場でご活躍されている皆さまからいろいろな話題を頂き、ゆったりと話し合いたいと思います。

また、三菱UFJ環境財団の寄附講義「多彩なアプローチによる環境学習Ⅰ」の一環として開催し、学生、市民の皆様に広く参加をお誘いすることにしました。せっかくの機会ですから、皆様の日ごろの環境創造活動を交流していただくために、午前の部はポスターセッションを、午後の部はシンポジウム・座談会および交流会として、じっくりお話ができるようにしました。

シンポジウムの趣旨説明

・塚原東吾（神戸大学教授）：アニミズムと生物文化多様性について、「近代的合理性」という概念を軸にした、歴史的考察：教の基層にあるものとして、近代的な合理性や理念化された宗教と対置されたものとして、ある意味で pejorative な表現として扱われてきた。より劣ったもの、より原始的なものが、ヨーロッパ近代の持つ「優れた」ものに対置され、（劣っていて、無根拠で、原始的で、わけのわからない）アニミズムによるとされてきた経緯がある。しかし、現実的に、生物文化多様性は、ある種のアニミズム的な世界観のなかで保持されてきている。生物文化の多様性とアニミズムには親和性が高く、（普遍的妥当性や標準化・画一化を標榜する）近代合理性とは非親和的である。そのため、グローバル化の時代において、生物文化多様性は、まさに近代合理主義の極北にあるパテント（特許）の問題として、争奪戦（バイオ・パイラシーとさえ呼ばれる）の対象となっている。すでにパテントの争奪戦を行う側に、知的・文化的な優位性は全くなく（政治的・経済的にはもちろん圧倒的に優位である）、醜い戦場の様相を呈している。そのため、このようなバイオ・パイラシーへの参戦を促すことに対抗する戦略として、（同じ土俵で戦う、というのではなく、そもそも、同じ土俵

に乗らない戦略をとるために）アニミズムの立場を意識的にとることが、ある意味では有効ではないのだろうか。近代合理性の限界を超える意識的戦略としてのアニミズム、というのは、またある種の「もったいなさ」の発見でもある。

・吉富友恭（東京学芸大学准教授）：私たち人間の自然に対する意識や態度を、国内外に見られる宗教や民俗、風習等の様々な視点からとらえ直し、生物文化多様性について考えます。自然科学、教育、芸術など、各分野で活躍されている専門家の方々からのお話を楽しみにしています。

13:15～13:50 石の文化から見たアニミズムと生物文化多様性：須田郡司（石研究家、写真家）：日本各地、世界各地の「石」を巡る中で、これらの石に生物多様性に連なるアニミズムを感じてきました。この感動を共有したいと思います。

13:50～14:25 魚の生物多様性とアニミズム：中野正貴（フォトジャーナリスト）：近年、日本のサケ増殖事業では、資源の増大を目的に、人工ふ化放流を主体とした魚や川の徹底管理を行ってきた。確かにサケは増えた。しかしそれと引き換えに、古くからの「人とサケの多様なかかわり」は失われつつある。

14:25～14:35 休憩

14:35～15:10 野鳥の生物多様性とアニミズム：安西英明（日本野鳥の会研究部長）：古今東西、信仰や習わし、お話やアートに登場する鳥たちから、生物多様性とともて人類文明のありがたさと危うさを考えてみたい。

15:10～15:45 水田の生物多様性と虫見板：宇根豊（農と自然の研究所代表）：池の中の鮒は、池の中のことはよく知っているが、池の全容を外から見ることはない。かつて日本語に Nature に当たる言葉がなかった理由である。この池が「自然」にあたる。現代人には池の中の鮒のまなざしが必要ではないか。

15:45～16:20 雑穀の生物文化多様性と神事：川上香（江戸東京博物館学芸員）：長野県飯田市上村で現在も継続されている、アワを用

いた作占いの事例を中心に発表し、他の地域での神事も取り上げつつ、アワ栽培やアワに寄せる人々の思いを紹介します。

16:20 ~ 16:30 休憩

16:30 ~ 17:10 座談会

17:30 ~ 19:30 交流会

文献：地域と連携する大学教育研究会編、地域に学ぶ、学生が変わる—大学と市民でつくる持続可能な社会、東京学芸大学出版会

第31回 環境教育セミナー

期日：2011年10月25日 10:30 ~ 12:00

場所：環境教育センター会議室

テーマ：気候変動・ピークオイルとトランジション・タウンの実践

話題提供者：ポール・シェファード

内容：大学院生共同研修会の一環として企画、実施し、タイ、日本およびイギリスの環境学習実践の交流をした。タイのラジャバト・プラナコン大学の教員、院生11名のほか、学大の教員、院生、学生ら15名が参加した。

環境学習シンポジウム

日時：2012年2月18日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター セミナーホール417室

テーマ：環境教育学への新たな提案

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、学部環境教育教室、大学院環境教育サブコース

共催：東京学芸大学学芸の森環境機構

後援：三菱UFJ環境財団、NPO法人自然文化誌研究会ほか

プログラム：

9:00 ~ 9:20 総合司会 松川誠一（東京学芸大学準教授）

・挨拶 高田滋（東京学芸大学環境教育研究センター長）

・趣旨説明 木俣美樹男（東京学芸大学学芸の森環境機構長）：「環境科」カリキュラムの構図と学芸の森環境機構の「環境+教育」戦略

9:30 ~ 12:00 環境科カリキュラムの必要性を探る

座長＝鈴木善次（大阪教育大学名誉教授）、市川智史（滋賀大学環境総合研究センター准教授）

1) 持続可能な社会の構築につながる環境学習～学びから行動へ、個人から社会へ：藤村コノエ（NPO法人環境文明21共同代表）

2) 地域に根ざした環境教育のモデル～新潟県南魚沼における「場の教育」の実践から：大前純一（NPO法人エコプラス事務局長）

3) 小学校での環境学習実践：中込卓男（八王子市立上屯分方小学校教諭）

4) 児童・生徒の生物多様性保全認識の向上のための学社融合カリキュラム～韓国（洪城郡洪東面）プルム実践からの学び：降旗信一（東京農工大学准教授）

5) 環境教育学、次のステップへ：渡辺隆一（信州大学教授）

12:00 ~ 13:30 ポスター・セッション：「環境+教育」研究・実践、GLOBEプログラム、植物と人々の博物館プロジェクト他の展示

1) 初等教育における環境教育の変化について—教材等の調査をふまえて—：土井美枝子（広島大学大学院社会科学研究科博士課程後期生）

2) 特別支援学校の農作業学習と環境教育：佐野守平（埼玉県立深谷はばたき特別支援学校）

3) 環境学習プログラムによる河川の捉え方の変容～河川の描写分析を中心に～：丸山瑛奈（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）

4) 水辺の古写真を素材としたデジタル・アーカイブ教材の開発と評価～中国杭州西湖を対象として～：方華（東京学芸大学環境教育サブコース）

5) 学芸の森環境機構、環境改善企画部門地球温暖化対策プロジェクトおよび環境調査評価部門環境報告書ワーキング・グループの活動内容について：堀雅臣・栗林猛（東京学芸大学施設課）

6) 自然保全ボランティアによる環境教育活動が自己の活動意欲・継続に及ぼす影響：齊藤愛子（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）

7) グラウンデッド・セオリーを用いたエコスクールの教育的意義に関する研究～学校生活

- と教育活動における影響を中心に～：秦範子（東京学芸大学大学院教育学研究科）
- 8) 戸川幸夫動物文学の源泉と、自然観の追求～山形を舞台にした人物研究と作品分析を中心に～：新沼溪（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）
- 9) 環境のための地球学習観測プログラム（GLOBE）：吉富友恭・深須祐子・神村佑（東京学芸大学グローブ日本事務局）
- 10) 自然文化誌研究会の環境学習活動：中込卓男・黒澤友彦（NPO 法人自然文化誌研究会）
- 11) ちえのわ農学校の活動：北翔一（東京学芸大学・サークルちえのわ代表）
- 12) ミクロコズムにおける Cyclopoida（ケンミジンコ類）の微小生物環境：更田暢宏（鳥取県琴浦町立赤碕中学校）
- 13) 丘陵地におけるアカマツの残存・衰退傾向とその要因検討～狭山丘陵でのアカマツを事例として～：横山伸夫（東京学芸大学大学院環境教育サブコース）
- 14) 「『心の芯』を耕す環境教育の体験学習プログラム」開発研究プロジェクト：原子栄一郎（東京学芸大学環境教育研究センター）
- 15) ごみ減量化団体「青空教室」の実践－小金井祭でのごみ減量化を目指して－：神村佑・齋藤愛子・中田ひかり・二ノ宮真理恵・小山田和代・村上秀行
- 16) 学芸の森プロジェクトの活動：真山茂樹（東京学芸大学広域自然科学講座）
- 17) 植物と人々の博物館プロジェクト：井村礼恵（植物と人々の博物館）
- 18) エコミュージアム日本村における植物と人々の博物館の展示活動：木俣美樹男・川上香・黒澤友彦・井村礼恵（自然文化誌研究会／植物と人々の博物館イニシアティブ）
- 13:30～17:00 新たな環境教育学への提案
座長＝安藤聡彦（埼玉大学教授）、松葉口玲子（横浜国立大学教授）
- 1) 東京学芸大学の環境教育のパイオニアワークに触発されて変貌する私の教育研究：原子栄一郎（東京学芸大学教授）
- 2) 地域と連携する大学教育と環境教育指導者

- 養成：樋口利彦（東京学芸大学教授）
- 3) 私の学び～自然保護教育からまちづくりまで～：小川潔（東京学芸大学教授）
- 4) ジオパークによる自然史教育：小泉武栄（東京学芸大学教授）
- 5) 河川環境の学び方、伝え方：吉富友恭（東京学芸大学准教授）
- 6) 農山漁村の生物文化多様性から学ぶ：木俣美樹男（東京学芸大学教授）
- 17:00 挨拶 山本克明（三菱 UFJ 環境財団理事）
- 17:30～20:00 懇親会
- 文献：環境学習シンポジウム要旨集

第32回 環境教育セミナー

期日：2013年3月9日 9:30～12:30

場所：東京学芸大学環境教育研究センター多目的教室

テーマ：都市で耕し、食べ物を作る

趣旨：都市農地の保全の在り方、有機農業などの農法、市民農園の拡大の方法、ホームガーデン自給農耕、在来野菜やその郷土食の保全継承などによる、家族や地域レベルでの食料安全保障および生物文化多様性保全について話し合う。

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、ホームガーデン研究会

共催：NPO 法人自然文化誌研究会、小金井市環境市民会議

話題提供者：

- 0) 木俣美樹男（ホームガーデン研究会）：話題設定についての趣旨説明
- 1) 末村成生（トランジション・タウン藤野、お百姓クラブ）：地元の畑を借用して、津久井大豆（地域固定種）や生姜を栽培、納豆や味噌づくりにも挑戦している。
- 2) 清水永一（瑞穂町の有機農家）：有機農法による市民農園を提唱している。
- 3) 藤賢治郎（小金井市民）：小金井市の生ごみのコンポスト化、これを活用する試験研究を市民として企画調整してきた。
- 4) 中村隆一（たんじゅん神奈川、農家）：農業

に転職し、今は炭素循環農法を実践している。

第33回 環境教育セミナー

ホームガーデン研究会報告会～地域における食料安全保障と生物多様性保全～

期日：2013年7月20日

場所：東京学芸大学環境教育研究センター多目的教室

趣旨：小規模自給農耕（山間地での農耕、有機農業、市民農園など）について各地の調査報告をする。東日本大震災直後の食料確保について当事者に聞く。都市と中山間地における農地保全、家族や地域での食料安全保障、生物多様性保全について話し合う。

主催：東京学芸大学環境教育研究センター、ホームガーデン研究会、NPO 法人自然文化誌研究会

プログラム：

9:30～12:00 / 13:00～14:30 調査報告

- 1) 地域における食料安全保障と生物多様性保全（東京都小金井市、山梨県小菅村、岩手県三陸を含む）：木俣美樹男（東京学芸大学環境教育研究センター）
 - 2) パレスティナ、ナブラスのコミュニティーガーデン：大澤由実（European University Institute）
 - 3) 宮城県気仙沼市大島の島っこ市：井村礼恵（鶴川女子短期大学）
 - 4) 南アルプス山村の暮らしと食：川上香（江戸東京博物館）
 - 5) 石川県白山麓地域の暮らしと在来品種の継承：西村俊（北陸先端科学技術大学院大学）
 - 6) 埼玉県秩父盆地における農業の持続：佐野守平（埼玉県立はばたき特別支援学校）
- 14:40～15:50 現地の当事者による報告
- 7) 岩手県山田町における東日本大震災直後の炊き出し：木村良一（岩手県山田町農業委員会）
- 16:00～17:00 座談会（総合討論）

資料：子どものための冒険学校の小史年表

木俣 美樹男

Archives of Adventure School for children since 1988

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

冒険学校を始めようと考えたのには二つの理由がありました。一つ目は、自分たちを常に現役探検家として鍛えることです。二つ目は、子どもたちを冒険に誘うように育てることです。東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部（以下、学大探検部）の独自性がここに見出せると考えたのです。私には、さらに三つ目の目的があり、自然や伝統文化の中での子どもの生態を学びたかったのです。当時、大学生相手の講義に慣れて、言い換えれば、自然や伝統文化についての学習体験の乏しい大学生あるいは大人に対する教育の可能性を疑い始め、子どもたちから始めないと環境学習の可能性は開けないのかと考えていたようです。

幸いなことに、当時の学大探検部には気のいい若者がたくさん集まっていました。しかし、多くの若い部員に熱意はあっても、活動資金はありませんでしたので、大学公開講座として企画をしました。担当係の方に相談に行きましたら、「どうして大学が子どもの講座を開くのか、前例がない」と相手にもされませんでした。例

のごとく、温厚な私もこれでは納得できないので、「学生たちと子どもたちがともに学ぶ講座こそが学大にあってしかるべきだ」と強く反論しました。

次第に声も大きくなり、近隣にお座りであった入学主幹（若い女性でしたがきっと今では文部科学省で高級官僚におなりでしょう）のお耳にも届いてしまいました。その結果、彼女の「やらせてあげなさい」との助言で、十分な資金援助を受けて企画は認められました。ただし、ご存知のように本来、働いた関係者が受け取るべき謝金など一切合切寄付していただいて、学生も教員 OB も無償ボランティアとして、子どもの参加費を軽減、あるいは家計状況により奨学金としました。

何百人という子どもや大人たちが盛り立ててきた冒険学校は 20 年近くの歴史をもち、東京都五日市町（現あきる野市）、埼玉県大滝村（現秩父市）、山梨県小菅村とベースキャンプ地は移動してきましたが、今でも新しい学生や子どもたち、多くの大人ボランティア、農山村の人々

東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」の小史

回数	西暦年	題名	開催場所	主催
第1回	1988	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第2回	1989	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第3回	1990	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第4回	1991	子どものための冒険学校	林野庁秩父大河俣造林宿舍	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第5回	1992	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第6回	1993	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第7回	1994	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第8回	1995	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第9回	1996	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第10回	1997	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第11回	1998	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第12回	1999	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第13回	2000	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第14回	2001	子どものための冒険学校	東京学芸大学農園	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第15回	2002	ぬくい少年少女農学校	東京学芸大学農園	東京学芸大学、自然文化誌研究会

2003年以降は、冒険学校は自然文化誌研究会主催で山梨県小菅村で、ぬくい少年少女農学校はサークルちえのわ主催で東京学芸大学環境教育研究センターにおいて継承開催されている。

に支えられて続いています。

いろいろなことがありましたが、すべて皆様と共有できる楽しい思い出がどんどん貯まっていきます。どれだけ私や、きっと皆様の人生を豊かにしてきたか、あるいはこれからも豊かにし続けると思います。

一方で、意図せずですが、いくらかの影響を日本の環境学習活動や環境教育学の歴史に与えてきたと、参加者の皆さんとともに自負しましょう。常に、新たな方法論のパイオニアであり、一つの活動のスタンダードを作ってきたと思います。私たちはいつも現場にいて、人間や農山村のことを考えながら、現役で活動しています。

この冊子はなんと多くの楽しい思い出に満たされていることでしょう。冒険学校で育った皆さんと私たちは、これからもさらに次世代の子どもたちとともに生き、健やかに育っていきましょう。

木俣美樹男（2005.8.8 カンタベリーの丘にて）

*この小文は、「冒険学校のあゆみ」の序文として書いたが、今のところ公刊に至っていない。既に序文の意味を失ったので、ここに年表とともに掲載する。

資料：個人史に重ねた環境教育活動の 50 年史

木俣 美樹男

Archives on the 50 years history of environmental education activity
based on a personal history

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

水俣病患者支援活動や環境教育活動に関わり、日本の環境教育活動の草創期の第2世代として、日本環境教育学会の創立準備会と初代事務局長を務めた。これらのことはすべて自らの意志で行った。高本文雄先生や自然文化誌研究

会の皆様はじめ、数多くの方々のご援助をいただいて実現したことである。

いずれ、詳細な日本環境教育創立史を上梓したいが、とりあえず、概略年表を掲載する。

個人史に重ねた環境教育活動の 50 年史

Kimata memo 2013.05.14

西暦	個人	日本	世界
1948	生まれる 御器所小学生、花壇づくり 桜山中学生、バス停に花を飾る		
1964	向陽高校生、園芸部、生物部、ラグビー部、生徒会	東京都小中学校公害対策研究会創立	
1967		全国小中学校公害対策研究会創立	
1968	静岡大学理学部生物学科生		
1970	アジア・アフリカ連帯委員会、ラグビー部、児童文学研究会 国立遺伝学研究所研修生		アメリカ合衆国環境教育法
1972	東京教育大学大学院農学研究科生、水俣病行動委員会	自然環境保護法	人間環境宣言
1974	東京学芸大学大学教育学部農学教室、学大昇検部 自然文化誌研究会)創立、山村調査開始		
1975	環境教育研究会の創立準備	全国小中学校環境教育研究会に改称	ベオグラード憲章
1977		環境教育研究会創立	トリシ環境教育政府間会議 世界環境保全戦略
1980	京都大学農学博士取得		
1983	インド亜大陸など海外調査開始、森とむらの会創立		
1986	東京学芸大学公開講座(環境関連)	環境庁環境教育懇談会設置	
1987	野外教育実習施設創立		
1988	環境教育学会創立準備会、雑穀研究会創立		
1990		日本環境教育学会創立	アメリカ合衆国環境教育法2
1991		文部省環境教育指導資料中高校編	
1992		文部省環境教育指導資料小学校編	リオ環境と開発に関する国連会議
1993	中央アジア調査	環境基本法	
1994		文部省環境教育指導教員講習会開始	
1995	タイでのユネスコ講師、国際シンポジウム	文部省GLOBEプログラム開始	
1996	インド・バンガロール農科大学客員	アジア太平洋環境教育シンポジウム	
1997	タイ、ラジャバトプラナコン大学客員	文部省ユネスコ日本アジア太平洋環境教育セミナー開始	テサロニケ国際会議
1999		食糧・農業・農村基本法	
2002	環境教育法研究会(環境文明21)	文部省新学習指導要領開始	ヨハネスブルグ環境開発会議(リオ10)
2003		環境教育推進法	
2005	雑穀・野菜、有機農業研究会など		持続可能な開発のための教育の10年開始
2006	イギリス・セント大学客員 エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館、現代GP推進		
2010	人々とたねの未来部会(CBD市民ネット)、		生物多様性条約COP10(愛知県名古屋)
2011	収集種子をKew植物園に移管		
2012	ホームガーデン研究会、地域に根ざした(鶴の)環境教育研究会、		リオ20
1013	伝統知研究会		生物多様性の10年
1014	東京学芸大学定年退職		
～	作家業を予定		

編集後記

東京の小金井市から愛媛県大洲市の山奥に移ってきて、3年と2ヶ月が過ぎた。動物であるヒトの順応性はすばらしく、すっかりもう愛媛の人になっている。360度を緑に囲まれた標高300mの山暮らし。集落に家は8軒、人口は17人。こちらに来てから、1人(90代の男性)が亡くなった。ここではヒトが「絶滅危惧種」であり、タヌキやイノシシ、アナグマの生活圏に入れてもらって暮らしている。

昨年の夏、そんな山暮らしをしている身に、ある人から「愛媛の生物多様性」を感じたり発掘したりする授業のコーディネーターをしてみないかという話をいただいた。県の自然保護課から事業委託を受けたNPOの市民大学で、1年間で200以上の授業を行うという。コーディネーターは全部で5人。単純に割り算をすると、1人40授業。1年は52週だが、そのうち最初の1~2ヶ月は準備で授業はできないだろうから、残り8か月が勝負。毎週ほぼ1つの割合で授業を企画し、実施するという超ハードな仕事である。

私が興味をもったのは、この事業が単なる生物観察会というのではなく、「内なる生物多様性」の発掘・発見を目的にしていることである。「内なる」というのはなんとも曖昧な表現だが、人間の生活や身体に内包されているという意味だ。たとえば、外で作業をしていたとき、血が出たらすぐにヨモギを探し、唾液を加えて手もみをして、傷口に当てて血を止める。私も子どもの頃、母や近所の人から教わったことであるが、似たようなことは大都会のビル群の中で生まれ育った人以外は、たいていの人が経験しているのではないだろうか。つまり、「内なる生物多様性」とは、人々の暮らしに根付いている生物の恵みを利用した生活文化のことである。

こうした生活の知恵は地域ごとに異なる。それは気候や地理的条件が異なるからだ。当然、生えている草や樹木も異なるし、それを求めてやってくる小さな昆虫や鳥、動物にも変化が現れる。そのような地域ごとに異なる生き物や自然からの恵みと人々の暮らしをもう一度再発見し、ネットワークを作りながらそれを大切な財産として次世代に伝える。できれば、エコツーリズムにもつなげたいというのが、県自然保護課のロードマップである。

授業づくりはまず現場リサーチから。私は車の運転ができないので、同居人をドライバーに雇って愛媛という土地をこの1年で20,000km走った。なかでも、第一次産業とリンクする「食」をテーマにした授業は楽しかった。愛媛の南に位置する宇和海は入り組んだリアス式海岸になっているが、この地形は山から流れてくるの栄養分を内海に留めておくためプランクトンが多く、とくに貝類(アワビ、イワガキ、マガキ、真珠など)の養殖に適している。他にも、イノシシやキジ、チーズなど、さまざまな食材を生物多様性の視点から授業化していった。

生徒は子どもからお年寄りまで、老若男女。先生は漁師さんや真珠養殖業者、漁協の職員、イノシシを育て解体・精肉加工をしている人、北海道から移住してきた日本屈指のチーズ職人など、こちらも多様である。現場の生の声を聞かせてもらい、体験できることはさせてもらい、食べ物の場合は試食を行う。食ばかりではない。絹糸(愛媛は養蚕が盛んだった)、和ろうそく(ハゼの実が原料)、和紙(コウゾ、ミツマタが原料)、染色や織物など、よく探してみると各地に保存会が作られ、伝統の技の保存を行っていることもわかった。

人口がどんどん下降し、地方では「村おこし」よりも「村じまい」が行政の課題になっている。よいしまい方をするためにも、愛媛の自然がもたらした人々の暮らしの記録と伝承にこれからも関わっていきたいと思う。

宮本幹江
(2013年7月)

民族植物学ノオト 第6号 (2013)

ISSN 1880-3881

発行日：2013年7月20日

発行所：東京学芸大学 環境教育研究センター 民族植物学研究室

発行責任者：植物と人々の博物館プロジェクト 木俣美樹男

発行所所在地：〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 環境教育研究センター

編集協力 & レイアウト＝宮本幹江 [時遊編集舎]

Ethnobotanical Notes No.6 (2013)

ISSN 1880-3881

Edited by M. Kimata

Laboratory of Ethnobotany and Plants & People Museum,

Field Studies Institute for Environmental Education,

Tokyo Gakugei University,

Koganei, Tokyo 184-8501, Japan

